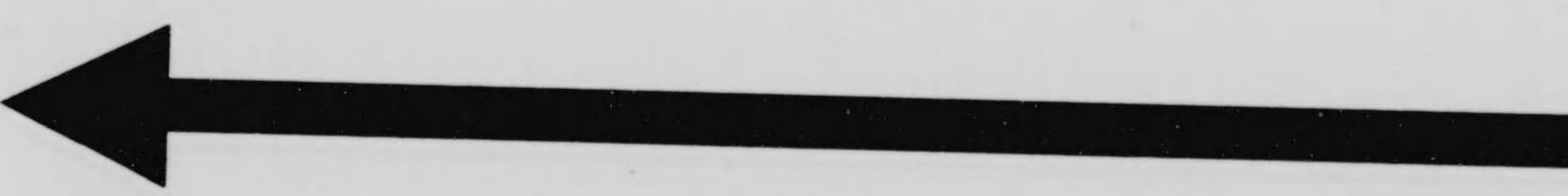




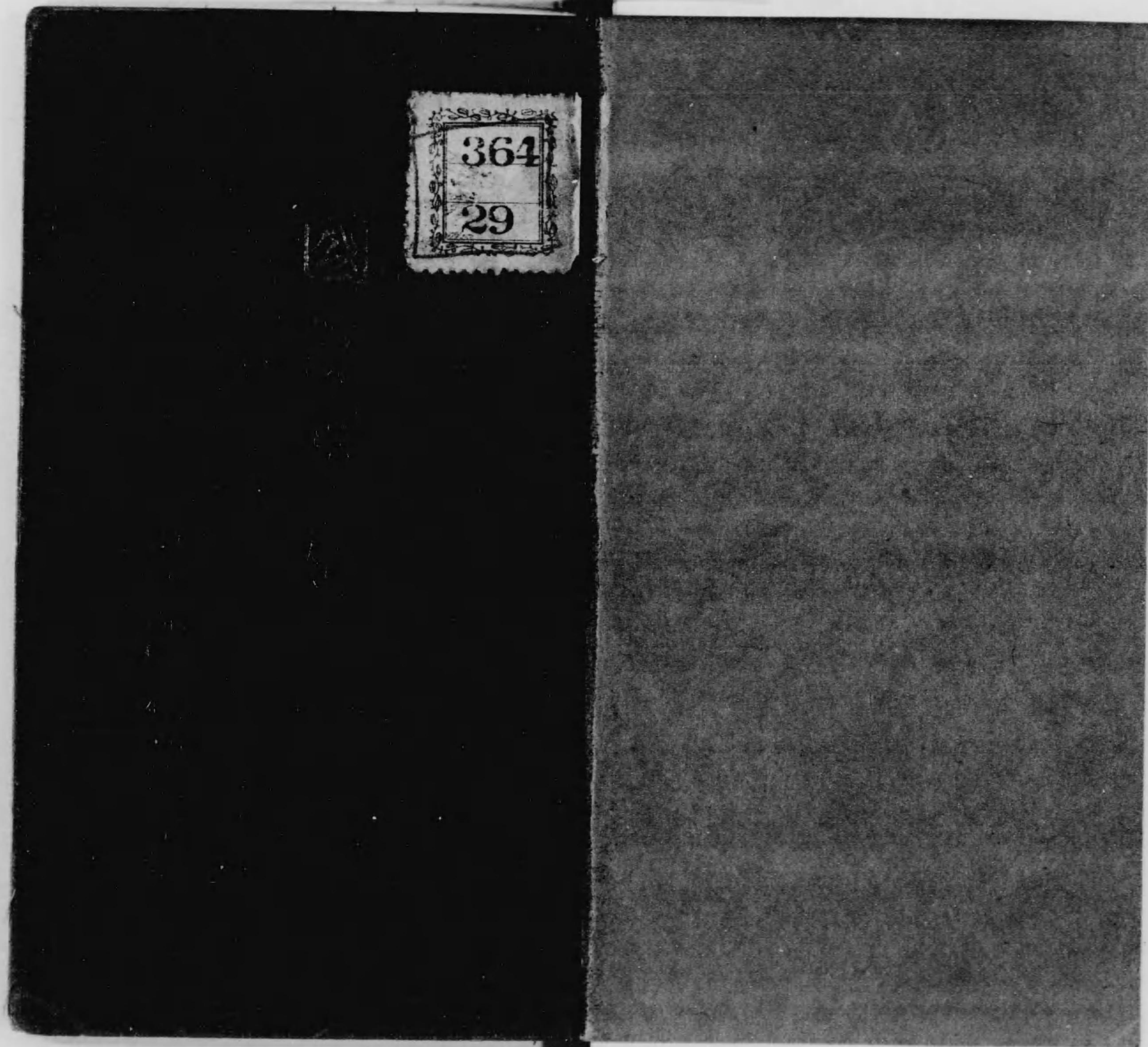
364
29



始



露光量違いの為重複撮影



露光量違いの為重複撮影

504

29

國語要覽

山口縣室積師範學校



國語

要覽

山口縣室積師範學校

大正
5. 11. 8
内交

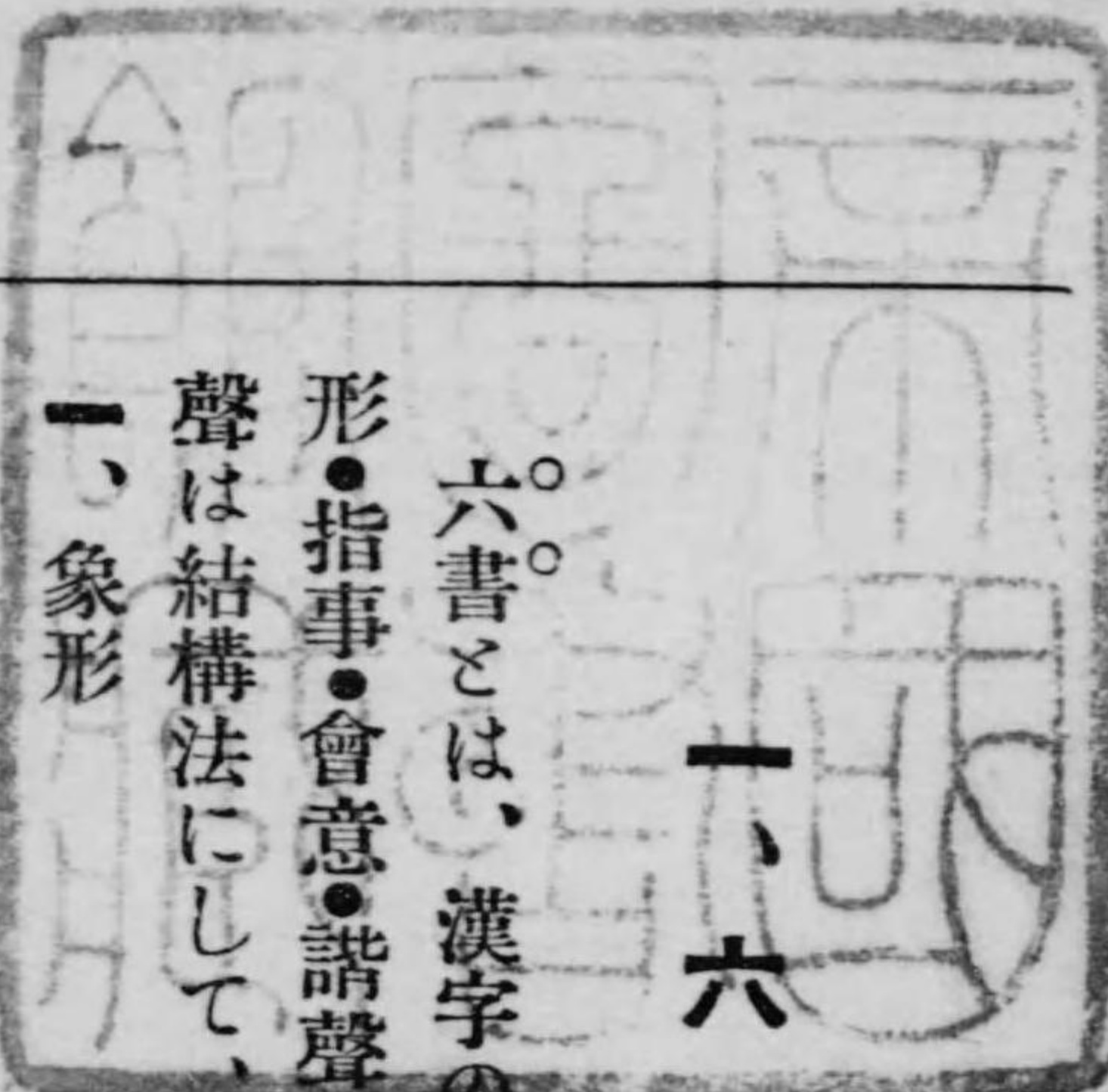
國語要覽目次

一六 書	一	一四 變體假名	四一
二 字音の種類	五	一五 萬葉假名	四二
三 國訓文字	八	一六 送假名法	四五
四 國字	九	一七 送字	五三
五 同字異音異訓	一〇	一八 句讀法	五四
六 俗字	一二	一九 分別書法	六五
七 略字	一三	二〇 文法上許容すべき事項	六九
八 運筆の順序	一五	二一 書翰心得	七六
九 反切法	二〇	二二 國語假名遣	一〇二
一〇 修辭法	三二	二三 字音假名遣	一二三
一一 合略の假名	三七	二四 同訓異字	一四三
一二 片假名の字源	三八	二五 小學校國語科教授要旨	二〇五
一三 平假名の字源	三九	附錄 參考書	二〇九

國語要覽

一、六

書



六書とは、漢字の構造及び使用に關する六種の區別にして、象形・指事・會意・諧聲・轉注・假借是なり。而して象形・指事・會意・諧聲は結構法にして、轉注・假借は使用法なり。

一、象形

象形文字とは、物の形體を象りて作りたる文字をいふ。例へば日・月・星・雨・山・川・艸・木等の類是れなり。是等は、古は篆書に

て其の形を顯はしたれども、後に隸書となり、又楷書と變はりし爲め、今はその原形を失ふに至りしものなり。

二、指事

指事文字とは、形に依りて事物の性質を指示したる文字をいふ。例へば、一・二・三・上・下・本・末・未等の類是れなり。即ち象形の法にて形あるものを畫き表はし、指事の法にて形なき事を指示する文字を設けたるものなり。

三、會意

會意文字とは、象形若しくは指事の文字を、二種若しくは二種以上組合せ、其の意を會して別義を表はせる文字をいふ。例へば明・鳴・位・仁・信・炎・焚・林・森・晶・轟・東・昧・劣・孝等の類是れなり。

四、諧聲

諧聲文字も、會意の如く、二字以上を組合せて造りたるものなれども、其の一部分は其の字の概念を表はし、他の一部分は其の字の聲音を表はせるものなり。象形・指事・會意の文字は、其の字音を知ること困難なれども、諧聲の文字は、其の扁・旁を見て、直にその音を知ることが得べし。而して、其の聲を付くる所、或は右に、或は左に、或は上・下・内・外にあり。例へば左の如し。

左形	江河猫狸
右聲	
上形	草藻竿笠
下聲	
外形	圃囿固閣
内聲	

右形	鶴鷄鳩頭
左聲	
下形	婆娑忠貨
上聲	
外形	問輿衡瓣
内聲	

五、轉注

轉注文字とは、一の字義を轉じて、他の近以せる意味に注ぎ、

遂に其の音を轉化したるものをいふ。例へば、

「樂」の字は、もと「音樂」の義なるを轉じて「快樂」の義に用ひ、
「度」の字は、もと「尺度」の義なるを轉じて「忖度」の義に用ひ、
「惡」の字は、もと「善惡」の「惡」の義なるを轉じて「惡む」の義に
用ひ、「上」の字は、もと「上へ」の義なるを轉じて「主上」・「献
上」等の義にも用ふる類なり。

六、假借

假借文字とは、文字の本義に拘らず、單に字音のみを假りて、
他の意義に用ふるものをいふ。例へば、

「豆」の字は、もと「俎豆」の「豆」の義なるを「菽」の義に用ひ、
「管」の字は、もと「竹筒」の義なるを「管轄」の「管」の義に用ひ、
「革」の字は、もと「皮」の義なるを「改革」の「革」の義に用ふるの

類なり。

二、字音の種類

字音(或は單に音ともいふ)とは、古の支那語音に基づき、「山・
川・草・木」を「さん・せん・さう・もく」と讀む類にして、字訓(或は
單に訓ともいふ)とは即ち我が國語に譯して、之を「やま・かは・
くさ・き」と讀むに對する名稱なり。其の字音には、支那語音傳
來の時代及び地方の異なるによりて、吳音・漢音・唐音・支那音等の
別あり。

一、吳音

晋宋以後(西曆紀元三百年頃)に至りて、我が國と支那との交通次第に盛
なりしかば、當時最も我が國との關係密なりし支那の南方、即

ち吳の地方に行はれし音を傳へたり。之を吳音といふ。吳音は即ち吳の國(今の江蘇省地方)の音にして、我が邦を距ること近く從て、交通便なりし爲め、互に往來して其の音を傳へたるなり。故に、物名或は日常用ふる語の如きは、吳音を以て行はるゝもの多く、特に佛教の如きは、其の布教者概ね吳より來りし爲め、讀經は吳音を用ふるに至りしなり。

二、漢音

推古天皇以後(西曆紀元六七百年頃)に至りて、隋・唐と交際を開くに及び、我が國の遣唐使・留學生等は率ね長安(隋唐の都)に赴きて、其の音を傳へたり。之を漢音といふ。

三、唐音

宋(西曆紀元一千年頃)より、彼我僧侶などの往來せしもの、更に彼の邦の

音を傳へしものあり。之を唐音といふ。唐音は吳音・漢音に比すれば、遙かに支那音に近し。

四、支那音

近時支那との交通頻繁なるに從つて、又支那今日の北京音を傳へたるものあり。之を支那音といふ。即ち支那音は唐音に近く我が國の人も稍之を用ふる者なきにあらざれども、そは支那人と相對する時に過ぎず。實際用ふるは地名等に止まるのみ。

今これ等諸音の例を擧ぐれば左の如し。

支那音	明	清	京	行	經
唐音	明	清	京	行	經
漢音	明	清	京	行	經
吳音	明	清	京	行	經

三、國訓文字

漢字には、本來の意義を有するに拘らず、我が國にて特に訓義したる文字あり。之を國訓文字といふ。或は國訓のみを用ひ、或は本訓・國訓を併用するものあり左の如し。

本訓	國訓	本訓	國訓
倭 <small>散ル</small>	タハラ	唄 <small>唄ノ功徳ヲホメタル韻文、即チ頌</small>	ウタ
儲 <small>分チアタフ</small>	マウク <small>(利益チ)</small>	串 <small>ツラヌク</small>	クシ
杜塞 <small>ク</small>	モリ	企踵 <small>テ立ツ</small>	クハダツ
瀧 <small>雨ノ降リシタ、ル貌、ハヤセ</small>	タキ	筈 <small>ヤハズ</small>	ハズ
存 <small>生キナガラフ、存在ス</small>	知ル 思フ	貫 <small>即時ニ價ヲ償ハズシテ其物ヲ求メ取ル</small>	モラフ
砌 <small>ミギリ(水限)</small>	ミギリ <small>(時)</small>	社 <small>土地ノ神</small>	コソ

四、國字

漢字に倣ひて我が國にて新に作れる文字あり。之を國字又は和字といふ。國字には訓ありて音なし。例へば左の如し。

詰 <small>ナシム</small>	ツム	調 <small>音ノシラベ、調子</small>	シラブ
安 <small>ヤスシ</small>	ヤスシ <small>(容易)</small>	楠 <small>ユズリハ</small>	クス
摺 <small>ヤブル</small>	スル	杯 <small>手ニテ物ヲ掬フ</small>	ナド
轡 <small>タヅナ</small>	クツワ	忤 <small>ヤツル</small>	セガレ
這 <small>迎フ</small>	ハフ	鶯 <small>高麗ウ</small>	ウグヒス
坪 <small>地ノ平ナル處</small>	ツボ	道 <small>ウカガフ</small>	サスガニ

峠 <small>サカキ</small>	榭 <small>トガ</small>	柁 <small>モミヂ</small>	柁 <small>カセ</small>	柁 <small>ハタケ</small>
榭 <small>タラシ</small>	榭 <small>フモト</small>	柁 <small>コガラシ</small>	柁 <small>ビヤウ</small>	柁 <small>ハナシ</small>
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	
榭 <small>ナギ</small>	榭 <small>ナギ</small>	柁 <small>オロシ</small>	柁 <small>カスガヒ</small>	

カマス 吹 飼カグ
 オモカグ 俵 鱈 鱈 鱈
 アツパレ 適 狎 條 糸
 サンチメートル 糶 糶 糶
 キログラム 肝 糶 糶 糶
 ヘクトリットル 糶 糶 糶
 ミリメートル 糶 糶 糶
 オドス 糶 糶 糶
 ハタラク 糶 糶 糶
 シカト 糶 糶 糶
 タスキ 糶 糶 糶
 デカメートル 糶 糶 糶
 サンチアール 糶 糶 糶
 トモ 糶 糶 糶
 コラフ 糶 糶 糶
 ギヤウ 糶 糶 糶
 マイル 糶 糶 糶
 ヘクトメートル 糶 糶 糶
 シツケ 糶 糶 糶
 ツカフ 糶 糶 糶
 ヤガテ 糶 糶 糶
 インチ 糶 糶 糶
 キロメートル 糶 糶 糶
 フイート 糶 糶 糶
 セン 糶 糶 糶
 ニホ 糶 糶 糶
 スベル 糶 糶 糶
 シギ 糶 糶 糶
 ツジ 糶 糶 糶
 ス井 糶 糶 糶
 ナマズ 糶 糶 糶
 マ 糶 糶 糶
 込 糶 糶 糶
 込 糶 糶 糶
 ナマズ 糶 糶 糶
 粉 糶 糶 糶
 デシメートル 糶 糶 糶
 ヘクトグラム 糶 糶 糶

五、同字異音異訓

スウ(カズ、カソフ) 數
 サク(シバ) 質
 シツ(ワマレツキ) 質
 チ(シチ) 質
 タク(ハカル) 度
 ド(ノリ、モノサシ、タビ) 出
 シユツ(イヅ) 出
 ス井(イダス) 出
 ソク(フサグ) 塞
 サイ(トリデ) 塞
 ラク(タノシ) 樂
 ガク(音楽) 樂

セキ(ツム) 積
 シ(タクハ) 積
 シヨク(クヒモノ、クラフ) 食
 シ(メシ、クラハス) 食
 チヨク(ナホシ) 直
 チ(アタヒ) 直
 ソツ(シモベ、軍卒) 卒
 シユツ(終ル、死ス) 卒
 フク(カヘル) 復
 フウ(フタタビ) 復
 セツ(キル、子シゴロ) 切
 サイ(モロ、スベテ) 切
 セキ(イル) 射
 シヤ(射) 射
 チヨ(アラハル、アラハス) 著
 チヤク(ツク) 著
 トク(ヨム) 讀
 トウ(ヨミキリ) 讀
 バウ(アラス、ソコナフ) 暴
 バク(サラス) 暴
 シユツ(シタガフ) 率
 リツ(ワリアヒ) 率
 アク(アシ) 惡
 ナ(ニクム) 惡
 シヤ(ヨコシマ) 邪
 ヤ(疑問ノコトバ) 邪
 シユク(ハフリ) 祝
 シウ(イハフ) 祝
 サツ(コロス) 殺
 サイ(ソグ、ムス) 殺
 エキ(カフ、カハル) 易
 イ(ヤスシ) 易
 イン(ノンド) 咽
 エツ(フサガル、ムセブ) 咽
 フク(クツガヘル) 覆
 フウ(オホフ) 覆
 パウ(ウシナフ、ホロフ) 亡
 プ(ナシ) 亡
 シヨク、シキ(シル) 識
 シ(シルス、シルシ) 識
 セツ(トク) 說
 エツ(ヨロコブ) 說

國語要覽

溺デキ(オボル)
ネウ(ユバリ)

俗

字

帥ス井(フサ、カシラ)
シユツ(ヒキ井ル)

衰ス井(オトロフ)
サイ(衰ノ服)

菌	毀	叙	奧	來	勾	凡	(字俗)
菌	毀	敘	奧	來	勾	凡	(字本)
鳳	群	淵	歲	玕	夾	土	(字俗)
鳳	羣	淵	歲	玕	夾	土	(字本)
並	宛	鈎	乖	隻	亞	友	(字俗)
並	宛	鈎	乖	隻	亞	友	(字本)
畢	蚤	乱	虔	兜	兒	灰	(字俗)
畢	蚤	亂	虔	兜	兒	灰	(字本)
龜	游	辭	庶	隙	常	旨	(字俗)
龜	游	辭	庶	隙	常	旨	(字本)
圖	着	兔	温	叟	笑	么	(字俗)
圖	著	兔	溫	叟	笑	么	(字本)
隱	鄙	婁	解	盈	兼	麼	(字俗)
隱	鄙	婁	解	盈	兼	麼	(字本)
派	舍	莽	佞	處	辜	卒	(字俗)
派	舍	莽	佞	處	辜	卒	(字本)

歸	鹹	囂	戲	爽	享	隨
歸	鹹	囂	戲	爽	享	隨
雙	羈	羨	懷	腦	秘	蒙
雙	羈	羨	懷	腦	秘	蒙
廉	牖	獻	畜	達	嬰	嬰
廉	牖	獻	畜	達	嬰	嬰
奮	雖	竊	隸	濕	再	爾
奮	雖	竊	隸	濕	再	爾
衡	霸	嘗	盧	樣	耻	恥
衡	霸	嘗	盧	樣	耻	恥
羸	鰥	屜	歛	函	盡	盡
羸	鰥	屜	歛	函	盡	盡
澁	隣	館	瓊	看	厨	廚
澁	隣	館	瓊	看	厨	廚
廩	賴	鎖	銜	鬲	襄	襄
廩	賴	鎖	銜	鬲	襄	襄

略

字

丁	(字略)
丁	(字本)
厶	(字略)
厶	(字本)
厶	(字略)
厶	(字本)
厶	(字略)
厶	(字本)
巾	(字略)
巾	(字本)
了	(字略)
了	(字本)
冂	(字略)
冂	(字本)

劍劔	肅肅	斷斷	寶寶	歸歸	処處	密密	參參	仏佛	画畫	區區	万万
巨距	属屬	筱篠	鼃鼃	辺邊	国國	余(尔)爾	真真	灯燈	昼晝	欧歐	厉厲
离離	献獻	踪蹤	岳圖	貞貌	点點	兩兩	付附	芦蘆	昏書	会會	田圓
鍊(鉄)鐵	覽覽	質質	岳嶽	躬躬	却卻	虫蟲	齊齊	与與	麦麥	傘傘	傘傘
鬱鬱	學學	躰體	為爲	旧舊	惡惡	沢澤	双雙	仮假	独獨	灵靈	灵靈
粘黏	齒齒	糧糧	称稱	困圍	糸絲	訳譯	礼禮	応應	木等	余餘	余餘
麻歷	誥讀	麗麗	尙當	彘錢	虽雖	釈釋	乾乾	岩巖	尽盡	実實	実實
関關	頭濕	厩廟	条條	発發	將將	即即	弃棄	徑徑	声聲	竜龍	竜龍

運筆の順序

文字	筆順	文字	筆順	文字	筆順
力(刀)ナ	一ノ	女	ムノ一	巾	一ノ一
勺	ノ	尢	一ノレ	无	二ノレ
广	、一ノ	疒	一ノン	厂	一ノ
尸	一ノ	戶	ノノコ	井	一ノ一
口(巳)ナ(レ)		巾	レノ	戈	一ノ、
土	一ノ一	山	一ノ口	手(毛)ノ二(レ)	
牙	一ノ一	岳	一ノ口	方	一ノ
玉	一ノ一、	羽	一ノ(刀)夕	瓦	一ノ
老	一ノ	日	一ノ	生	一ノ一
耳	一ノ	止	一ノ	用	一ノ一

坐	善	傘	飛	風	非	青	黃	麥	鹿	長	金
从十一(一从二)	羊立口	傘十(人一从二)	飛一(一飛)	凡一(一)	川三三	三一(四十二四)	廿一日一(八)	十从人夕	广一(一)比	一三レ	人千ソ一
再	假	凸	鼎	黽	黻	黑	來	主	並	鹵	鳥
一口土	イヨ一(三)又	口口一	目口片	口一(一)目ヨ	一(一)八口	四二一(一)	十从人	上十一	ソ一(一)ソ一	ト口(一)ソ一	イヨ(一)ヨ
戌	戌	凹	佛	龜	互	也	乘	雨	佳	世	上
ト一(一)ノ、	戌一	凹二	イ弓(一)弓	名(一)コヨ	一(一)フ二	フ一(一)レ	二(一)ヨ七人	一(一)コ一(一)ス	ノ一(一)三	廿(一)レ	一(一)二(一)一(一)二

門	里	走	赤	角	另	禾	皮	夬	氏	臣	聿
一ヨ一(一)ヨ三	里一	土ト人	土月ハ	クノ(一)土	一レア	ノ一(一)人	ノ一(一)又	フ、レノ	ノレ一(一)レ	一五(一)手(一)レ	一三(一)二(一)一
門	鬯	馬	食	糸	片	虍	サ	色	舟	疋	母
一王(一)王(一)一	×口(一)ヒ	一(一)一(一)一(一)一(一)一	人、ヨレ(一)又	么(一)ハ	ノ(一)上(一)一	ト(一)ヒ(一)ノ	ハ(一)一(一)ノ	ク(一)五(一)レ	ノ(一)一(一)一	フ(一)ト(一)人	レ(一)一(一)一(一)一
齒	身	齊	鼠	豕	示	處	爪	火	水	白	田
止(一)一(一)一	レ(一)一(一)一	字(一)刀(一)氏(一)月(一)二	白(一)多(一)レ	一(一)ノ(一)一(一)一(一)レ	二(一)一(一)八	一(一)レ(一)一(一)レ	レ(一)一(一)レ	ハ(一)人	レ(一)フ(一)レ	レ(一)一(一)一(一)一	レ(一)一(一)一(一)一

七、反切法

我が國にては、漢字の反切を説明するに二法あり。一は假名(五十音圖)により、一は羅馬字(アルファベット)による。後者は比較的簡便なれば、羅馬字を解する者は之によるを便とす。今、順次其の方法を述べん。

一、假名によりて説明する法

反切法を假名(五十音圖)に依りて説明するには、五十音圖を書き連ね、所謂父字の初の音と母字の初の音とを捕へ、父字の同音(同行)と母字の同韻(同列)とに當る音を求め、二字音以上なる時は、更に母字の韻を添へて求むるところの字音とす。又父母共に同音(同行)なる時は母字に歸し、父母共に同韻(同列)なる時は父字に歸せしむ。例へば左の如し。

は父字に歸せしむ。例へば左の如し。

(イ) 一字音 子 卽里反

サ → ↑ ス — セ — ヲ

ラ → ① ル レ ロ

(ロ) 二字音 孫 思渾反

カ → ② ス — セ → ③

(ハ) 父母共に同音(同行)なるもの刑

カ → ④ キ ク ケ → ⑤

(ニ) 父母共に同韻(同列)なるもの助

サ → ⑥ ス セ ソ
カ → ⑦ キ ク ケ コ

二、羅馬字に依りて説明する法

羅馬字によりて反切を説明するには、先づ父母字の音韻を正し

く綴り表はし、父字の發聲を母字の母韻に配合して得たる音は即ち求むる音なり。殊に羅馬字に依る時は、從來の二重反切の必要を見ずして、如何なる場合にも一律に説明し得るものなり。されど、羅馬字にて説明するに當りて注意すべき要件は、第一漢字音を正しく綴ること、第二發聲と母韻との部分を正確に區別することなり。勿論普通成熟音は、清濁共に此の二要件を知ること容易なれども、拗音・鼻音及び入聲の韻にて俗にいふ「フ・ツ・ク・チ・キ」等の韻を有する字音に於いては、大に注意せざるべからざるなり。例へば左の如し。

一字音 子 シ 卽里反 Sok—ri
 Si..... (シ)

一、清音 二字音 孫 ソン 思渾反 Si—kon
 Son..... (ソン)

三字音 相 シヤウ 息亮反 Sok—ryo
 Syo..... (シヤウ)

二字音 木 ボク 莫穀反 bak—kok
 bok..... (ボク)

二字音 玉 ギョク 魚欲反 gyo—yok
 gyok..... (ギョク)

八、修辭法

修辭法は一名美辭學ともいひ、昔時支那及び我が國に於て、文話又は文則などと名づけて説きたるものにして、思想感情を明ら

かに且麗はしくいひあらはす方法を講ずるものなり。英語にてレトリック (Rhetoric) と稱するは、即ち此の修辭の原理方法を一つの學として組織立てたるものなり。今左に修辭上重要な事項に就きて其の大要を述べし。

一、明喩法

異なりたる事物の類似の點を認めて比較説明するを**比喩法**と稱す。比喩法の中には、「如し」「似たり」等の語を添へて、明らかに其の比喩たるを知らしむるものあり。之を明喩法 (又は直喩法) といふ。左の例の如し。

落花雪の如し。

三界は火宅の如し。

男子の一言、金鐵の如し。

卯の花、雪に似たり。

蘭の花はさながら蜂に似たり。

明喩法を巧に用ふれば、文に趣味を増し、意味を明晰ならしむる効あり。されど、左の諸項に注意せざれば、趣味を滅却し、却つて滑稽に陥るの憂あり。

イ、嶄新にして人の意表に出づるを要す。故に古來云ひたしたることは成るべく避くべし。

ロ、比喩の穩當なるを要す。故にあまり突飛なる比喩は用ふる勿れ。

ハ、容易に類似點を見出し得べきものなるべし。されど同種の事物を比較すべからず。

二、暗喩法

暗喩法は又穩喩法とも云ひ、内容に於いては明喩法と全く同一なりと雖も、唯形式に於て異なるのみ。即ち明喩法にありては

或る事物・動作を「他のものに似たり」と断定すれども、暗喩法にありては、「似たり」と言はずして、「直ちにその物なり」と断定し、毫も比較の痕跡を顯さざるなり。例へば左の如し。

軍人は國家の干城なり。 氷炭相容れず。

別路の袖に、草葉の露宿る。

君子の徳は風にして小人の徳は草なり。草に風を加ふれば必ず偃す。

右の如く、暗喩法は文勢を増し、感情を強からしむる點に於いて、確かに明喩法に優れり。

三、諷喩法

諷喩法は一に寓言法ともいひ、他の事物に托して、暗に人事を戒むるものをいふ。例へば左の如し。

塵積りて山となる。

燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや。

末つひに海となるべき山水も、しばし木の葉の下くゝるなり右の如く、諷喩法は多くは教訓・諷刺若しくは自己の主張をほめかす場合に用ひらる。「桃太郎」かちく山「舌きり雀」「花さか爺」等の如きお伽噺は、全體に亘りてこの法を用ひたるものなり。

四、擬人法

擬人法とは、人間以外の事物に向つて、人間の如き性格或は動作を假托したるものなり。例へば左の如し。

歲月人を待たず。

花笑ひ、鳥歌ふ。

蒲團着て寝たる姿や東山。

月斗牛の間に徘徊す。

桃李言はねば誰と共にか昔を語らん。

右の外、「猿蟹合戦」の如きは、全篇擬人法を用ひ、猿及び蟹なごを人間に擬して作りたるものなり。

五、引用法

引用法とは、文意を闡明し若しくは裝飾せんが爲に、適切なる古語・故事を文中に借り用ふるをいふ。而して其挿入せる語句は多く「」にて包み、文の他の部分と區別せらる。

例へば左の如し。

「時は金なり」と、宜なるかな。

「衆口金を鏢す」と、古人の金言宜なるかな。

世は、「塞翁が馬」のためしに漏れず。

凡て引用は、著明なる古語・故事を用ふべく、さまで著名ならざる語句を引用し、若しくは難解の古語・故事等を用ふることは、

力めて之を避くべし。

六、對照法

對照法とは、性質相異なる語句を互に反照するが如き位置に排列し、其の對照に依りて、兩者の意味を一層明確・雄健ならしむるをいふ。恰も、黒き物の傍に白き物を置けば、兩者互に著しく感せらるゝが如し。例へば、

一將功成つて萬骨枯る。

の如きは、其の感慨眞に深く、且つ快く表はされたるものといふべし。

七、對句法

對句法とは、單に同形式・同口調の語句を並べて綴るをいふ。例へば左の如し。

柳は緑、花は紅。

仰げば理想の峯高く、俯すれば學びの海深し。

豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

八、設問法

設問法とは、實際上疑義を質すにあらず。唯語氣を強からしめんが爲に、故意に問を設けて讀者の注意を促すをいふ。左の如し。

舜何人ぞ、我何人ぞ。

夕にいねて朝に起き、營む所何事ぞ。

九、誇張法

誇張法とは、文勢を増し感情を深刻ならしむる爲め、事實よりも過度に大きく、或は過度に小さく言ひ做すをいふ。左の如し。

力、山を抜く。

一日千秋の思あり。

燕山の雪片大さ蓆の如し。

蛋の足音・蟻の私語まで聞く。

一〇、現寫法

現寫法とは、過去の事又は將來に起るべきことを現在目前の事の如く叙するをいふ。こは形式上より云へばき・けり等過去助動詞又はらん・べし・まし等の未來助動詞を用ふべき所に現在動詞を用ふるなり。例へば左の如し。

足利の代、進歩の殊に著しかりしは繪畫なり。

千萬歳を經と雖も亦此の如し。

一一、漸層法

漸層法とは、其の程度を層一層進め行くやうに語句を排列して聽者の感を絶頂に導くをいふ。例へば左の如し。

天の時は、地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。

一人奮死せば以て十に對すべし。十以て百に對すべし。百以て千に對すべし。千以て萬に對すべし。萬以て天下に冠たるべし。

一二、咏嘆法

咏嘆法とは、咏嘆の聲を漏らして激切なる感情を言ひ表はすをいふ。例へば左の如し。

あな恨めしの世の中や。
嗚呼天道是か非か。
げにおもしろの景色やな。

一三、擬態法

擬態法とは、事物の音聲又は状態を模して之を活現するをいふ。而して其の音聲を模するを寫聲法といひ、状態を模するを寫容

法といふ。例へば

鳥がかあ／＼鳴いて居る。

打ち出す祝砲、どん／＼／＼。

伐木丁々。

珊々として聲あり。

の如きは寫聲法に屬し、

そろ／＼參らう。

この紙はすべくする。

國旗の門なみひいらひら。

の如きは寫容法に屬す。而して此等は簡單に實況を寫すに功多きを以て、寫生に近き文には屢用ひらる。

一四、反復法

反復法とは、讀者をして、感を深うし情意を動かさしめんが爲め、同一の語句を反復重用するをいふ。例へば左の如し。

うれしやく。

松島や、あゝ松島やく。

峯といふ峯、谷といふ谷、見渡す限り一面の薄紅、櫻の雲に包まれて居る有様、何とも言へない美しさである。

一五、省略法

省略法とは、句を簡潔にせんが爲め、緊要ならざる語を省くをいふ。句、簡潔となれば、自ら遒勁となるが故に、此の法は一種の増勢法なりと謂ふを得べし。例へば左の括弧内を省略するが如し。

余は(其の事を)少しも知らざりき。

勅なればいとも畏し、(されど)鶯の宿は(如何にせしか)と問は、如何答へん。

又「義理もたち世間もたつ。」の如きは、「世間に對する面目もたつ。」といふべき所なれども、而か言はずして讀者の想像に訴へたる所に妙味ありといふべし。

一六、掛詞・縁語

掛詞・縁語は、次の枕詞・序詞と共に和歌又は韻文特有の修辭法にして、

イ、掛詞とは、同音異義の語詞にして、兩様の意に云ひかけられたるものをいふ。例へば左の如し。

秋の野に人まつ(待つ・松) 蟲の聲すなり。われかど行き
ていざとぶらはん。

立ちわかれないなば(往なば・因幡) の山の峯におふるまつ
(松・待つ)としきかば今歸りこん。

ロ、縁語とは互に縁ある語を選びて言ひ表はすをいふ。例へば

左の如し。

さして行く笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれが
もなし。

難波江の葦のかりねの一夜ゆるみをつくしてやこひ渡る
べき。

一七、枕詞・序詞

イ、枕詞とは、語調を調へ、又は言葉を飾る爲めに、或る語の
上に冠せしむる慣用語をいふ。例へば、山といはんが爲に
足引の山といひ、旅といはんが爲に草枕旅などいふ類なり。
尙ほ左の如し。

王くしげ明けゆく空を限りにて、待つ夜短き郭公かな。
さざなみや滋賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな。

如何ならん事に逢ひてもたゆまぬは我が敷島の大和たま
しひ。

ロ、序詞とは、枕詞の如く次の語を言ひ出すために用ふるもの
なり。枕詞は多く五字なれども、序詞は字数一定せず。こ
れも慣例あるものなれども、枕詞よりは自由なり。左の例
の如し。

東路のさ夜の中山なか／＼に何しに人を思ひそめけん。
あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかもね
ん。
水莖の岡の葛の葉かへす／＼書き置く。

九、合略の假名

書寫の便宜上、二字以上の假名を合して一字となしたるものあり。之を合略假名といふ。例へば左の如し。

片假名	フ(コト)	キ(トキ)	モ(トモ)	シ(シテ)
平假名	と(こと)	き(より)	も(なり)	

一〇、片假名の字源

片假名は、漢字の點畫を省き、或はその偏旁等を去りて、記號様の文字としたるものなり。古來吉備眞備の作れるものなりと云ひ傳ふれども詳ならず。但し之を五十音圖に組立てしは、吉備眞備なるべきか、其の字源左の如し。

ア阿	イ伊	ウ宇	エ江	オ於
カ加	キ幾	ク久	ケ氣	コ己

サ散	シ之	ス須	セ世	ソ曾
タ多	チ千	ツ川	テ天	ト止
ナ奈	ニ仁	ヌ奴	ネ <small>子禰</small> 子	ノ乃
ハハ	ヒ比	フ不	ヘ反	ホ保
マ末	ミ三	ム牟	メ女	モ毛
ヤ也	イ〇	ユ勇	エ〇	ヨ與
ラ良	リ利	ル流	レ礼	ロ呂
ワ和	井韋井	ウ〇	エ惠	ヲ乎

一一、平假名の字源

平假名は、草書の體により筆數を省きて作れるものにして、伊呂波歌と共に、弘法大師の作なりといへども確證なし。但し伊呂波歌は、弘法大師が佛教の趣意を今様歌の調に詠みたるものなりといふ。其の歌及び字源左の如し。

色は匂へど、散りぬるを、 (諸行無常)

我が世誰れぞ、常ならむ。 (是生滅法)

有爲の奥山、今日越えて、 (生滅滅已)

淺き夢見し、酔もせず。 (寂滅爲樂)

い以ろ呂は波に仁ほ保へ反と止ち知り利ぬ奴
る留を遠わ和か加よ興た太れ礼そ曾つ闘ね禰
な奈ら良む武う字ゐ爲の乃お於く久や也ま末
け計ふ不こ己わ江て天あ安さ左き幾ゆ由め女

み美 し之 ゑ惠 ひ比 も毛 せ世 す寸 ん元

一一、變體假名

變體假名は、漢字の草書を以て假名に使用したるものなり。左の如し。

あ	ほ	ひ	字	わ	わ
う	の	た	久	々	あ
さ	は	ま	た	た	た
さ	ぬ	川	江	津	た
あ	取	ま	ぬ	糸	乃
え	お	を	ぬ	扈	母
ま	万	を	堂	先	毛

(イ) 字音を假りて他意に用ひたるもの。

可久也歎敢(かくやなげかん)人見點鴨(ひとみてんかも)

戀度南(こひわたりなん) 今會悔拭(いまぞくやしき)等

(ロ) 字訓をかりて他意に用ひたるもの。

辛人(からびと) 射去火(イサリビ) 夢爾谷(ゆめにだに)

伊去羽計(いゆきはばかり) 辭鴛鴦將待(ことをしまたん)

等

三、正訓

正訓とは漢字の元の意味を存して假れるもの、即ち字の義と言の意と相當せるものをいふ。

天地・乾坤(あめつち) 明旦・明(あした)

神・神祇(かみ) 將裝飭(よそはん)

夫・孀(つま) 手弱女(たわやめ)等

四、義訓

義訓とは、漢字の義を得て讀ませたるものをいふ。而して、之には、或は極端に走り殆んど謎的に用ひられたるものも尠からず。

不聽(いな) 火氣(ケブリ) 耳言(サ、メク)

安定(シヅマル) 八十一(ク、) 戀水(ナミダ)

全夜(ヒトヨ) 山上復有山(イデ(出))等

一四、送假名法

送假名に關しては未だ一定の法則なし。然れども現今の國定教科書は明治四十年六月國語調査委員會にて制定したる送假名法によりて編纂せられたるものなれば之の

法に従ふは今日に於ては穩當且便利なり。本法は之に據りたるものなり。

○送假名法の四綱領

- (一) 活用語の語尾變化を書きあらはすこと。
- (二) 二語の末に附屬する助詞、助動詞を書きあらはすこと。
- (三) 三語の末に含まるゝ接尾語をかきあらはすこと。
- (四) 漢字を音讀せるものは漢字以外をかきあらはすこと。

一、名詞・代名詞

一、名詞・代名詞には送假名を附せず。(但し代名詞「何れ」「孰れ」のれは送る)

山川 人 我 此 彼 何れ

二、動詞より轉じて名詞となるものゝ中、左のものには本の動詞の活用を書きあらはして送假名とす。

(一) 漢字を活用したる動詞の名詞となれるもの

封じ 通じ 察し 達し 書損じ

(二) 動詞の延言

思はく

(三) 他の動詞の活用形を含む動詞

語らふ

(四) 單語に當てたる漢字僅かにその一部分に該當せりと見ゆるもの

赤らみ 定まり

(五) 動詞に助動詞の添はれるもの

謂はれ 使はしめ

(六) 本來名詞の動詞となれるもの

宿り 皺み

(七分詞の性質を有して名詞と動詞との中間に在るもの

聞きに来る 買ひに行く

(八) 自他辨別の必要又は漢字を音讀せる同形の語との辨別の必要
あるもの

残り(殘し) 渡り(渡し) 預け主(預り主)

變りなし(變なし) 讀み書き(讀書)

三、動詞・形容詞の下にさみげ等の接尾語を附加して成れる名詞
は動詞・形容詞の送るべき部分を添へて送る。

甘み 重み 可笑しみ 憎しみ 樂しみ 露けさ 歸るさ
傷ましき 物思はしげ 心有りげ 物思ひげ

四、數詞は一・二のつ 半ばのば 萬づのづを送る。

五、代名詞の下に来べき助詞は必ず書きあらはす。

其の家 我が國

二、活用語

一、活用語は語尾の活用する部分を送假名とすべし。

書かず 善く行ふ 立つて待つ 悲しいかな

二、活用語の活用せざる部分に他の語の活用形を含むものは送假
名とす。

驚かす 惑はす 怪しむ 全くす 悲しがる

三、延言は其の延びたる語を送る。但し「曰く」ははを送らず。

願はくは 宣はく 言へらく 語らふ 曰く

四、也の終止形、候の連體形、終止形には送らず。

五、「けし」の語尾を有する形容詞に用ひられたる漢字には「猛し」

の一語を除く外すべて「けし」を送假名とすべし。

遙けし 豊けし 長閑けし 猛し

六、形容動詞に用ひられたる漢字には語尾の「なり」「たり」「かり」を送假名とす

詳なり 異なり 巍然たり 善かり 悪しかり

〔「なり」の語尾を有するものは詳かなり 豊かなり などの如く「か」を送る人もあれど本則に於ては送らざるものと知るべし〕

七、副詞より轉じて活用語となりたるものは活用以外尙副詞の送假名を附す。

再びす 以てす 未だし 甚だし 専らなり

八、漢字二字以上を以て複合活用語に訓じたる場合にはそれごとく送假名を附す。

流し出す 思ひ煩ふ

但し二音の動詞が上部に来るときは誤讀を生ずる場合にのみ送る。

受取る 讀終る 折り込む 折れ込む

九、單語に當てたる漢字僅に其一部分に該當せりと見ゆる場合には其他は送假名として書あらはすべし。

指さす 棹さす 春めく 黄ばむ 赤らむ 安らかに
横たはる 元より

三、副詞・接續詞

一、活用語より轉じて副詞・接續詞に用ひられたるものは其活用を書きあらはして送假名とす。

因つて 極めて 總べて 及び 案ずるに 敢へて
委しく 餘りに 代るく

但し 豫て 渾て 於て 雖も 况や の如く副詞接續詞にのみ用ふる漢字の場合は次の規則による。

二、三音以上の副詞・接續詞に用ひたる漢字には最後の二音を送假名として送る。

併し 殆ど 必ず 尤も 但し
二音のものにても 若し 縦し 斯く 能く のみは最後の二音を送る。

三、各 愈 偶 交 屢 抑の如く二音以上の語の重音にて一字の漢字を當つるものは誤讀を生ずる虞あるときに限り語の右側下に「ふ」を附し送假名を附せず。

四、日外 加之 遮莫 流石 就中 假令 生憎等の如く漢字の熟語を訓讀したるものには送假名を附せず。

五、副詞・接續詞の語尾に助詞・接尾語あるものはその送るべき部分を送へて送るべし。

争でか 必ずしも 聊かも 併しながら

一五、送 字

同じ文字の續く時、下なる文字に代用する符號を送字といふ。一字を送る時は、片假名には「、」を、平假名には「、」を、漢字には「々」を用ひ、二字以上は、假名には「く」を、漢字の楷書には「々々」を、行草書には「々々」を、假名と漢字と混合せるものには「く」を用ふ。「く」は又踊字とも稱す。例へば左の如し。

片假名 {チ、(父)
オモヒく(思々)

平假名

ちゝ(父) おもひく(思々)

漢字

碌々(楷書) 多尙(行草書) 假名と漢字と混合せる時 (構へてく)

一六、句 讀 法

- 一、句讀は文と文との關係、文中の語句相互の關係を明かにするを以て目的とす。
- 二、前項の目的のために左の五種の符號を使用す。

、 テン

● クロマル

□ カギ

□ フタヘカギ

三、文勢語勢其外の便宜によりては誤解を生ぜざる限に於て、本法の規定に拘らず符號を省き又は之を加へ施し、又は彼是符號を換用することを得。

一、シロマル

シロマルは文の終止する場合に施す。

例 人が雨戸を明けて居る。

旗を持ちませう、私は。

生きて歸る者僅に三人。

二、テ

テは左の諸種の場合に施す。

一、形式より見れば、終止したれども意義より考ふれば次の文に連続せる文の下。

例イ、和助が樹の下を出て、まだあまり遠くも行かぬ時のことでありました、目が眩む様ないなびかりがすると同時に耳が裂ける様な恐しい音がしました。

ロ、皆さんは蝙蝠を鳥だと思ひましたでせうが、蝙蝠は鳥ではありませんね、頭もからだも鼠に似て居るものです。

(注意)左の如きものは、形式意義共に終止したる場合の例なり
イ、和助は樹の下を出て、未だ遠くは行きませんでした。その時目が眩む様ないなびかりがすると同時に、耳が裂ける

様な、恐しい音がしました。

ロ、蝙蝠には翅がありますけれども、鳥ではありません。皆さんはそれを知つて居ましたか。

二、並列せる同趣の文の下、但し最後の文の下は此限にあらず。

例イ、山を越えて行かうか、河を越えて行かうか。

ロ、彼は男子の氣慨のない者である、丈夫の本領を失つた者である、我大和民族の面目を毀損した者である。

ハ、人の短をいふことなかれ、己の長をとくこと勿れ。

三、並列せる同趣の語句(單語を列挙する場合を除く)の間

例イ、此文は平易に、正確に、且面白く作られたり。

ロ、みなりのわるい、併し身分はよさうな子。

ハ、規則の整へる、約束の行はるゝ、實に歎賞に堪へたり。
 ニ、兄には鉛筆を、弟には石筆を與へたり。
 ホ、項羽は黄河の北で戦ひ、劉邦は黄河の南で戦つた。
 ヘ、父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
 ト、蕨を採るのは春で、茸を採るのは秋だ。

四、連體形にて終れる語句の下に助詞なきとき、其下。

イ、交通・通信機關の完備せる、人をして國の廣袤の短縮せるにあらざるかを疑はしむ。

ロ、クルップの職工を率ゐることの巧なる、經驗に富み、且權力を有するの老練家も尙遠く及ばざる程なりき。

五、ごも、ば、には、て、間、處、際、限、時、外等の如き接續

の語に導かれたる長き語句、又はすべて副詞の意趣を有する長き語句の下。

例イ、友だちは頻に上京を勧めるけれども、兄はそれに賛成しない。

ロ、酒と煙草とは衛生に害あれば、之を禁するを可とす。

ハ、知らせを聞いて巡査の馳せて來た時には、賊は既に形を隠して居た。

ニ、家の前に小川ありて、家の後に花園あり。

ホ、本日通運にて送り出し候間、御ためし下され度候。

ヘ、これら・窒扶斯其他各種の惡疫流行の際、特に豫防を怠るべからず。

ト、午前七時までに乗車する者に限り、電車賃を半減す。

チ、明治二十七年に韓國に騒動の起つた時、清國はことほりなしに兵隊を韓國へ送りました。

リ、特別の事情あるものゝ外、入場するを許さず。

六、主語と述語との間隔甚しきとき、主語の下。

例、父は、太郎の此の頃の様子がすつかり變つて來たのを、ひごく心配した。

七、主語・客語等を特に提起せるとき、其下。

例イ、梅の植ゑてある青磁の鉢、あれは私が父に貰つたのです
ロ、高山彦九郎・蒲生君平・林子平、これを寛政の三奇士といふ。

ハ、こんもりと茂つて居る森の影、あそこに友だちの家があるのです。

八、獨立の感嘆詞及び呼掛の語の下。但し文の中間に置きたるときは其前後。

例イ、ああ、兵吉はこれより如何にして日を過すならんか。

ロ、おとうさん、あなたはどこへいらつしやいますか。

ハ、むかふに見える景色は、まあ、奇麗ではございませんか

ニ、それでも、にいさん、雨が降つたら、しやうがないではありませんか。

九、顛倒して置きたる述語の下。

例、忠なるかな、正成は。

一〇、他の語句を隔て、掛るべき語句が、直に其下に來る語に掛るが如く見ゆる虞あるとき、其下。

例イ、太郎は非常に、活潑なる運動を好めり。

ロ、今日は少しばかり、面白い話を聞きました。

ハ、先生この、芋虫に似た虫は何といひますか。

ニ、次郎は、目も見えず、耳も聞えぬ父をいたはつて居る。

一、上下の語句の粘着する虞あるとき其間。

例イ、今、日本の國運は旭日の東天に冲する勢あり。

ロ、頼朝、範頼・義經をして平氏を攻めしむ。

ハ、兵を起して、我國に、てむかひたり。

三、クロマル

クロマルは列舉せる單語の間に施す。但し助詞・接續詞にて並列せる場合は此限にあらず。

例、横須賀・吳・佐世保及び舞鶴は日本の軍港なり。

四、カギ

カギは左の諸種の場合の右の肩と左の脚とに施す。

一、對話を文中に入るゝとき。

例、次郎は父の袂を引きて「おとうさん、今の人はきちがひでせうか。」といひたり。

二、獨語を文中に入るゝとき。

例、虹は「日は唯照るだけだから、誰も譽める人がないのだ自分は此通り美しいから、人が皆譽めるのだ」といひました。

三、獨思を文中に入るゝとき。

例、太郎は嬉しくてたまらず、「ああ、やつぱり起きて書かう起きて書いても居眠さへせず、勉強する様に心掛ければよいのだから。」と決心した。

四、語句を引用するとき。

例イ、孔子も「利によりて行へば、怨多し。」といへり。

ロ、ロックは「教育に關する思想」といふ書を著せり。

五、フタヘカギ

フタヘカギは、對話・獨語・獨思・引用の中に、更に他の對話・獨語・獨思・引用を入るとき、其の右の肩と左の脚とに施す。

例、父は文吉に「もしおとうさんがおまへのいふ通りになつて、遊び行つて選舉をしなかつたら、人は『文吉のおとうさんは村のためを思はない人だ、村中の人の迷惑するのをかまはない人だ。』とわるくいひませう。おとうさんはそんなことをいはれることはきらひです。」といひました。

一七、分別書方

(此分別書方は文部大臣官房圖書課の立案にして、國定教科書編纂上大體準據せられたるものなり。)

一、總則

各品詞はそれづくに他の語より離して書く。

二、特例

一、助動詞

助動詞は敬語動詞より轉じたる助動詞、並に指定の助動詞の「だ」「だった」「です」「でした」及び其活用を除き總べて上の語に續けて書く。

〔續くる例〕 かゝせる。 かゝせられる。 とります。 み

〔續けぬ例〕

させたい。うけぬ。たてた。しぶくて。
 おあそびなさる。おうけいたす。よろ
 しろ。ございます。隣の犬だ。隣の犬
 だつた。ふかいだらう。ゆかぬだらう
 ゆきませぬでした。ゆかぬでせう。ふ
 かいでせう。

二、助詞

助詞の「ば」「し」は上の説に續けて書く。

〔例〕よく かんがへれば わかる。
 ゆかなければ あはれぬ。
 よければ こい。
 じも かくし ゑも かく。

とうきやうへも いったしにつくわうへも いた

た。
みちは ちかいし つれもあるから ゆくこ

とにしよう。
「の」の外の助詞「は」「も」「か」の上に来るときは續けて書くことを得。

〔例〕うちにはをらぬ。たらうとはあそばぬ。
 ふででもかける。じらうともあそぶ。
 やまよりかひくい。

三、注意

一、名詞・代名詞及び數詞

イ、名詞又は代名詞の下に在る複數、又は尊稱を示す語は離し

て書く。但し既に單位語となりたるものは此限にあらず。

〔例〕きみ　ら。　たけを　さま。　おまへ　さん。

〔但し書の例〕ともだち。　ごとも。　おとうさん。　ね

えさん。

ロ、助詞「の」又は「が」によりて二つの名詞を繋ぎたるものも既に複合名詞となりたるものは一語として合せ書く。

〔例〕たけのこ。　くすのき。　をにがしま。

ハ、姓と名とは離して書く

〔例〕わけ　の　きよまる。　やまだ　かうさく。

ニ、數詞の名詞と結びつきたるものは一語にして合せ書く。

〔例〕ふたばん。　よしな。　いちまい。　さんさつ。

二、形容詞及び副詞

イ、「しづかな」「かうしやうな」の「な」は合せ書く。

ロ、「おもに」「立派に」「やすく」と「だんせんと」の類の「に」「と」は合せ書く。

ハ、「あきらか　だ」「あきらか　だつた」「かすか　です」「かすか　でした」の類の「だ」「だつた」「です」「でした」は離して書く。

ニ、「あたたか　なら」「きれい　なら」の類の「なら」は離して書く。

一八、文法上許容すべき事項

(明治三十八年十二月二日文部省告示第百五十八號を以て、教科書の檢定又は編纂に關し、文法上許容すべき事項を左の如く定めたり。)

一、「居り」「恨む」「死ぬ」を四段活用の動詞として用ゐるも妨なし。

二、「シク、シ、シキ」活用の終止言を「アシシ」「イサマシシ」など用ゐる習慣あるものは之に従ふも妨なし。

三、過去の助動詞の「キ」の連體段の「シ」を終止言に用ゐるも妨なし。

〔例〕火災は二時間の長きに亘りに鎮火せざりし。

金融の静謐なりし割合には金利の引弛を見ざりし。

四、「コトナリ」〔異〕を「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」と用ゐるも妨なし。

五、「、セサス」といふべき場合に「セ」を略する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

〔例〕手習さす。 周旋さす。 賣買さす。

六、「、セラル」といふべき場合に「、サル」と用ゐる習慣あるものは之に従ふも妨なし。

〔例〕罪さる。 評さる。 解釋さる。

七、「得シム」といふべき場合に「得セシム」と用ゐるも妨なし。

〔例〕優等者にのみ褒賞を得せしむ。

上下貴賤の別なく其地位に安んずることを得せしむべし
八、佐行四段活用の動詞を助動詞の「シ、シカ」に連ねて「暮シシ時」「過シシカバ」などいふべき場合を「暮セシ時」「過セシカバ」などとするも妨なし。

〔例〕唯一遍の通告を爲せしに止まれり。

攻撃始より陥落まで僅に五箇月を費せしのみ。

九、テニヲハの「の」は動詞・助動詞の連體言を受けて名詞に連續するも妨なし。

〔例〕花を見るの記。

學齡兒童を就學せしむるの義務を負ふ。

市町村會の議決に依るの限りにあらず。

一〇、疑のテニヲハの「や」は動詞・形容詞・助動詞の連體言に連續するも妨なし。

〔例〕有るや。面白きや。父に似たるや母に似たるや。

一一、テニヲハの「とも」の、動詞・使役の助動詞及受身の助動詞の連體言に連續する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

〔例〕數百年を経るとも。如何に批評せらるゝとも。強ひて之を遵奉せしむるとも。

一二、テニヲハの「と」の動詞・使役の助動詞・受身の助動詞及時の助動詞の連體言に連續する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

〔例〕月出づると見て。嘲弄せらるゝと思ひて。

終日業務を取扱はしむるといふ。萬人皆其の徳を稱へけるとぞ。

一三、語句を列擧する場合に用ゐるテニヲハの「と」は誤解を生ぜざる限り最終の語句の下に之を省くも妨なし。

〔例〕月と花。宗教と道德の關係。

京都と神戸と長崎へ行く。

最終の「と」を省くときは誤解を生ずべき例。

史記と漢書(と)の列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳(と)を讀むべし。

一四、上に疑の語あるとき下に疑のテニヲハの「や」を置くも妨なし。

〔例〕誰にや問はん。 幾何なるや。 如何なる故にや。

如何すべきや。

一五、テニヲハの「も」は誤解を生ぜざる限に於て「とも」或は「ごも」の如く用ゐるも妨なし。

〔例〕何等の事由あるも（ありとも）議場に入ることを許さず。

期限は今日に迫りたるも（たれども）準備は未だ成らず。

経過は頗る良好なりしも（しかども）昨日より聊か疲労の状あり。

誤解を生ずべき例。

請願書は會議に付するも（すとも、すれども）之を朗讀せ

ず。

給金は低きも（くとも、けれども）應募者は多かるべし。

一六、「といふ」といふ語の代りに「なる」を用ゐる習慣ある場合は之に従ふも妨なし。

〔例〕いはゆる哺乳獸なるもの。 顔回なるものあり。

理由書

國語文法として今日の教育社會に承認せらるゝものは、徳川時代國學者の研究に基き、専ら中古語の法則に準據したるものなり。然れども、之にのみ依りて今日の普通文を律せんは、言語變遷の理法を輕視するの嫌あるのみならず、これまで破格又は誤謬として斥けられたるものと雖も、中古語中に其の用例を認め得べきもの尠しとせず。故に文部省に於ては、從來破格又は誤謬と稱せら

れたるもの、中、慣用最も弘きもの數件を擧げ、之を許容して在來の文法と並行せしめんことを期し、其許容如何を國語調査委員會及高等教育會議に諮問せしに、何れも審議の末許容を可とするに決せり。依て自今文部省に於ては教科書檢定又は編纂の場合にも之を應用せんとす。

一九、書翰心得

一、書翰文の各部

一、前文

前文は冒頭の禮詞と時候挨拶との二なり。

イ、冒頭の禮詞。今日普通に用ゐらるゝものは別項一覽に擧げたり其の中肅啓・謹啓等は町重なる禮詞にし

て拜啓・拜呈等は上中下何れにも用ゐられ、急啓は急ぎの場合に用ゐらる。

ロ、時候挨拶。先方の身分、自己との關係によりてそれ〴〵書き分けざるべからず。特に安否を伺ひ又通知する必要なときは省略することあり。

前文は特別の場合は全部之を略することあり。其用語は之を一覽に示せり。

二、本文

書翰文の要件はこの本文にて述ぶるものなれば能く先方に通ずるやう認めざるべからず。而して書翰文體は慣用的の事柄多くして。普通文法を以て律すべからざるものあれば特に注意せざるべからず。

三、末文

末文は留書と文末の禮詞との二なり。

イ、留書、

「先は云々」の文句なり。之は手紙によりては必ずしも要とせず。

ロ、文末の禮詞。

之は冒頭の禮詞に應ずるものなれば、始めが「謹啓」「肅啓」などならば「敬具」「謹言」「不宣」などの如き重き禮詞を用ふべし。「拜啓」は前述の如きものなれば「敬具」「草々」「頓首」等それ／＼場合によりて之に應ず。用語は一覽に在り。

四、日附

月日を書くを普通とす。輕き場合には日のみを書き、年號をも

書くは重用書類に限る。

五、署名

署名は氏名を記すを無難とす。氏を略し、或は名を略するには場合あり。宛名署名一覽表の如し。雅號は親友間には往々用ふる事あり。但し慶弔其他儀式的の書翰には如何なる間柄にても氏名を書す。

六、宛名

宛名も氏名を書けば無難なり。氏を略し名を略するには場合あり。次の一覽表の如し。師長に對しては氏と雅號とを用ふることもあり。但し如何なる間柄にても慶弔其他儀式的の書翰には氏名を書せざるべからず。

宛名	氏名 氏名 氏又ハ氏名	署名	氏名 氏名 氏又ハ氏名	兩者の間柄	目上又ハ同輩 同輩にして親密 目上にして親密 同輩にして極親密 目下(召使等) 姻親の目上 目下(子、弟妹等)
倫稱(父上、伯母上等)名	倫稱名	倫稱	倫稱		

七、官職名

官職名。公の交際又は職務上交通の書翰には宛名、署名共に官職氏名を正しく認む。何々學校長、何大尉等の如く姓の下に官

職名を附するは其の略式の場合なり。私交上の書翰には決して官職名を用ふべからず。

八、尊稱

宛名の下には必ず尊稱を附す。尊稱の最も普通なるものは「殿」
「様」なり。殿は多くは公文書。又は儀式的の場合に用ふ。隨て
親密の意を含むこと少し。されど又「殿」は親疎に拘らず目下の
者に對して之を用ふ。子、妻、召使などに假名にて「どの」「ご
のへ」など書く。様は私交上に限りて用ゐらる。親密の意を有
するが如し。目下に對して用ふる事少し。此外主なる尊稱次の
如し。

閣下(高位高官) 先生(師長、學者) 兄、大兄、賢兄(同輩、
先輩) 兄、大兄、君(同輩、後進) 御中(官衙、學校、店舗、

團體等

九、協附

協附は文末の宛名の協附と封筒に書くものとあり。一は敬意を表はし、一は意味を通ず。

イ、敬意を表はす協附

机下、梧下、案下、玉案下、硯北、(同輩、先輩)

侍史、侍曹、御左右、執事、(目上)(軍人に對して虎皮下と

も使ふ)

膝下(父母、姻親間の長者)

ロ、意味を通ずる協附(封筒協附)

平信、平安、無事(變りたることなき場合)

親展、直披、親披(他見を憚る場合)

要用(重要な場合)

急、至急、至急親展(急ぐ場合)

貴酬(返書の場合)

一〇、追て書、袖書

本文に副貳的の事を書き加ふるを追て書といふ。「追て」「二伸」「尙々」「追白」等を以て書き始む。巻紙を切り離して後尙書くべき事柄を落したる場合巻紙の始めの餘白に認むるを袖書といふ。袖書は心易き間柄に用ゐらるべきものにて、目上に對し丁寧に認める場合には、斯る不用意はあるべきものに非ず。

二、認め方

一、用具

イ、巻紙、白無地を用ふるを禮とす。極めて手輕き私の書信に半紙又は野紙、重要書類又は公の手紙に野紙を用ふ

ることあり。慶事其他儀式的の書翰に奉書半切又は奉書二ツ折りを用ふれば最も鄭重なり。巻紙の繼目は右より左へ重る様使用すべきものにして反對なるは不吉なり。印刷したる用箋は儀式的の場合若くは目上に用ふべからず。

ロ、封筒、

封筒も白無地を用ふるを禮とし、慶弔其他儀式的に用ふる封筒は白無地一重を用ふ。然れども平信には模様なき淡色の二重封筒を用ふること常なり。

若し西洋封筒を用ふれば用紙も揃ひの書翰紙を用ふべし。是等は普通(No.6)六號又は(No.6.5)六號半の形にして白色を常とす。

ハ、墨、

墨色濃きに過ぐれば趣なく淡きは禮を失す。凶事に

二、認め方

イ、左右、

は墨色を薄くする人もあれど必ずしも其要なし。西洋紙にはペン、黒インクを用ゐて書くべし。朱、赤インクは禮を失す。

上下の空地 本式は右三寸六分左一寸八分、略式は右二寸八分、左一寸四分と昔は定まれり。小笠原流にては手紙を巻きたる巾の二巾半だけ右をあけ、左をその半分とす。大體の標準として可ならん。

上の空地は三四分とし下をその半ばとす。但し半紙を用ふる際には普通野紙の型に従ふべし。

ロ、文字、

書體は行書を主とし、場合により楷書及草書を交へ用ふ。我流の崩し方粗雑なる書方等をなして不明瞭

となり、失禮に亘る如きことあるべからず。特に目上に對しては注意を要す。

文字の太さは一行十字内外(卷紙の場合)を適度とす。行間は五分内外なるべし。尤も文の長短によりて多少斟酌して可なり。

ハ、字配り、「貴君」、「御一同様」、「貴家」等の敬稱又は「御」「奉」等の文字が行の終りに來らざる様にし、「小生」「弊屋」等の謙稱、又は「候」「間」「處」等の文字又は「は」「に」「を」等他に連続する文字が行の始めに來らざる様にすべし。若し書き詰らば行末の左脇に重ねて書くも可なり。熟語は別行に亘らざる様すべし。陛下、殿下等最も敬意を表する場合は闕字をなすことあり。

とあり。

文末の禮詞は、留書の文が行の上部に終るときは、其行の下方に認め、行の下部に終るときは其次の行の下部に認むべし。

三、日附、日附は文末の禮詞の次の行に本文より一字下げて認むべし。

ホ、署名、日附の行の下部に其終りを本文の終りと揃へて書く。又草書を用ひず、多少字形を少くす。連署の場合は宛名に近き方上席なり。

ヘ、宛名及脇附、署名の行より一寸はご間をおき、月日の高さより書く。墨色を濃くし、筆に充分しませて書く。脇附は宛名の左下に少し小さく書く。

ト、追て書、袖書

追て書きは宛名より五分ほど離し、本文より一二字下げてやゝ小さく書く。袖書きは初めの空地に本文より二三字下げて二折目の邊より小さく書く。

以上認め終らば必ず読み返して書き損じ脱字其他の誤りを検すべし。

四、封じ方

イ、卷方、末より内に巻きてたゞむべし。此の際宛名の處に折目を生ぜざる様にすべし。卷の中は普通の封筒に入る位を適度とす。卷終りたるとき巻紙の端が卷の左側より二三分の處にあるをよしとす。

巻紙を末より外に巻けば巻紙の切端卷の右に向ふ。

之、凶事に於ける卷方なり。

この巻紙の端のある方を卷の表とす。

ロ、封じ方、卷の表を封筒の表へ向けて入るべし。封じ目には

「ハ」封、「ニ」糊等を記す。

ハ、封筒認め方、封筒の表には届先の宿所を右側に書き、次に宛名を宿所よりも稍下げて書く。封筒脇附は左側中央下部に認む。

裏面には差出人の宿所氏名を中央下部に稍小さく書め日附は左上部に書く。

書状を郵便にて差出す時は届先の宿所氏名は詳細明瞭に記すを要す。差出人の宿所氏名も正しく書くべし。人に託する場合には宿所は書かざるものなり。

郵便には切手を封筒表面左上の隅に貼附す。

三、葉書

一、認め方

葉書は封書の略式のものど心得て、總て封書に準じて認め方を知るべし。筆を用ふるを主とすべしと雖も、ペンを用ふるも差支へなし。鉛筆は磨滅の恐あれば用ひざるを可とす。葉書を倒又は横にして用ふるは可ならず。通信面は左右上下を明くる事はなきも全面に字配りよく書くべし。餘白多き或は字のこみ合へるは見苦し。要するに紙面狭くして一定せるものなれば最初によく腹案を立てざるべからず。徒らに略式なりとて粗略にながれて敬意を失ふべからず。

日附署名は本文と同じく通信面に認むるを本體とすれども（年

賀状は之に依る）普通には餘白少きにより宛名と同面に認む。

届先の宿所氏名の認め方は封筒と同注意たるべし。但し封筒脇附を缺ぐ事勿論なり。

葉書は略儀のもの故、重要な用件又は敬意を重んずる場合は之に依るべからず。

二、往復葉書。照會・問合せ等至急返事を要する場合か若くは先方に返信料を拂はす能はざる場合に用ふ。往信面と返信面とを取違ふべからず。

三、繪葉書。濫用すべからず。旅行先の景色、遠く隔れる異郷の光景を親しき人に知らす等によるし。自筆のものは一層妙なり。

四、年始状

イ、文言

年始状には文を書くこともあれど、特別なる関係の人に宛てたる場合の外は、從來慣用の次の如き賀詞を書くを普通とす。

謹賀新年、恭賀新年、等は最も普通にして謹賀新禧、恭賀新春等も同じ。謹奉賀新年は多少改まりたる語にして賀正は稍輕し。尙是等の語の次に併謝平素之疎遠、尙祈將來之交誼と書き加ふる事もあり。

尙ほ和歌、俳句、若くは英語の賀詞等を用ふることもあり。日附は年月日を記せば最も鄭重なり。年號に干支を書き、月に正月、日に元旦と書することあり。又單に月日のみを記し、年の干支と元旦とを書し、又單に元旦とのみ記す事もあり。

署名は如何なる場合にも氏名を記すべし。

賀表の様式は大正二年十二月十六日の官報にあり。謹奉賀新年、年月日、官位勳功學位爵氏名を書す。

ロ、種類

葉書、葉書が最も普通なり。交際廣く數百枚の賀状を要する人は印刷せるものを用ふることもあれど左もなければ自筆のものを可とす。

繪葉書、繪葉書は親しき間柄にはよろし。自筆のものは殊に妙なり。

名刺、名刺に賀詞を添へたるものを開封として用ふることも近時次第に行はるゝが如し。

封書、鄭重にするため、若くは特別なる間柄（例へば父母

其他の姻親に對して用ふ。

賀表、賀表は大廣奉書を用ふ。但し美濃紙を代用するも妨なし。

ハ、認め方

葉書

謹賀新年

大正六年一月一日 氏名

恭賀新禧

併謝平素之疎遠
尙祈將來之交誼

丁巳元旦

山口縣室積町

山川

良助

賀表

横ニツ折

<p>謹奉賀 新年 (紀元節)(天長節)</p>	<p>年月日 官位勳功學位爵氏名</p>
折目	折目

書翰用自他稱呼一覽

先	方	自	分
貴君、貴殿、貴兄、貴下、 足下、閣下、尊公、老臺、 大兄、老兄、仁兄、そのも と、その許様、御身、御手 前、あなた、あなた様、	御父上、御父上様、御尊父 様、御大人、御賢父、嚴君	拙者、小生、小子、小弟、 迂生、野生、老生、不肖 (父又は師に對して)、小官(役人が用ふ) (同)、本官(同)、本職(同)、 小職(同)、こなた、こゝも と、私、私ども、	父、愚父、家父、私父、老 父(老年の父)、實父(養父に對して)、(死

父	母	祖父
尊大人、父君、(死にたるは 御先人、御先考、御先代、 亡き御父上)	御母上、御母上様、御母堂 御母公、北堂、御尊母様、 母君、御母君、母御様、(死 にたるは、御先妣、亡き御 母上)	母、愚母、家母、私母、老 母(老年の母)、實母(養母に對して)、(死に たるは、亡母、先妣、亡き 母)
にたるは、亡父、先父、先 人、先考、先代)	御祖父様、御大父様、御ち ち様、御祖母様、御大母様 御ばば様、	祖父、ちち 祖母、ばば

兄	弟	姉
御兄上、御兄上様、御令兄 兄君、御兄君、兄御、御兄 御様、(死にたるは、故御令 兄、亡き御兄上)	御令弟、御賢弟、弟御様、 御弟御様、(死にたるは、故 御令弟、亡き弟御様)	御姉上、御姉上様、御令姉 御姉君、(死にたるは、亡き 御姉上様、故御令姉)
兄、愚兄、家兄、舍兄、實 兄 <small>(義兄に對して)</small> 、(死にたるは、亡 兄)	弟、愚弟、舍弟、家弟、(死 にたるは、亡弟)	姉、愚姉、女兄、(死にたる は、亡姉)

妹	妻	子	女
御妹御様、御令妹、賢妹、 (死にたるは、故御令妹、 亡き御妹御様)	奥様、令夫人、令室、御内 室、御令閨、(死にたるは 故亡等の字を附す)	御令息、御賢息、御子息様 若旦那様、御令嬢、御息女 様、御娘御様、(死にたるは 故御令息、亡御賢息、故御 令嬢、亡き御娘御様)	御令嬢、亡き御娘御様)
妹、愚妹、女弟、(死にたる は、亡妹)	妻、家内、愚妻、荆妻、(死 にたるは亡妻)	忤、愚息、頑兒、豚兒、娘、 拙女、鄙女、(死にたるは 亡き忤、亡き娘、亡鄙女、	

家 族	居 宅 居 處	冒
皆々様、御一統様、御全家、御家族、各位、各様、御近親、御親族、御家門、御一門	御宅、尊宅、貴家、貴邸、高堂、貴館、そちら様、御店、貴店、御社、貴社、貴校、御校、御地、貴地、錦地、御市、御町、御村、その御地、貴地方、	御手紙拜誦致候、尊書拜讀仕候、芳翰拜披仕候、御來
皆々、一同、各、家族のもの、親戚ども、親戚のもの	小館、弊社、當校、當地、弊地、當市、當町、弊村、鄙郷、こちら、こゝもと、	拜啓、拜呈、謹啓、肅啓、急啓、書面を以て申上候、

頭禮詞	安	否
諭之趣敬承仕候、御下命逐一承知致候、何月何日附の貴書拜受致候、拜復、復啓	益御清穆(御清安、御清適、御清榮)奉恭賀候、愈御健勝(御勇健)奉大賀候、益御安泰(御安祥)大慶の至りに奉存候、愈御昌榮(御繁昌、御隆榮)奉欣賀候、いつも御多祥健羨に堪へず候、始終御機嫌よく何よりの御事	
前略、前文御免被下度候、	頑健、無事、無異消光、幸ひに恙なく、御蔭様にて變りも無く相暮し、一同たつしやに、乍憚御休神、御休意、御安心、御放念、御放慮、御省慮、御安堵等、	

授 受	來 往	に奉存候等、
御受納被下、御笑納被下、御笑留被下、御查收被下、	御來車、御光來、御來駕、御貴臨、御越し、御出、御立寄、御入來、	
忝く頂戴仕候、有り難く拜見致候、正に落手仕候、落掌致候、入手致候、	參上、拜趨、拜芝、拜光、御伺ひ、參堂、拜晤、拜顏拜眉、	

二〇、國語假名遣

○紛るゝ假名 (清音) (括弧を施し線を以て連れたるは互に相紛るゝ假名)

發 音	わ	や	は	あ
行	行	行	行	行
ワ	(わ)	や	(は)	(あ)
イ	(ゐ)	(い)	(ひ)	い
オウ	(う)	(ゆ)	(ふ)	(う)
エ	(ゑ)	(え)	(へ)	(え)
オ	(を)	よ	(ほ)	(お)

○紛るゝ假名 (濁音) (右に同じ。但し本縣にては全段紛る)

發 音	だ	ざ
行	行	行
丨	だ	ざ
ジ	(ぢ)	(じ)
ズ	(づ)	(ず)
丨	で	せ
丨	ぞ	ぞ

○紛るゝ假名

(下にふ又はうの來る場合は段と段と紛る。濁音同断)

あ段	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら
お段	お	こ	そ	の	ほ	も	よ	ろ	
發音	オ	コ	ソ	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	

え段	え	せ	て	れ	る
お段	お				
發音	キヨ	シヨ	チヨ	リヨ	ヨ

一、動詞語尾名遣

○動詞の語尾は必ず同行に變化するが故に一假名遣を知らば他は推知するを得。

假名	活用種類	假名遣
は) ひふへ ひふへ ひふへ	四段 上二段 下二段	思ふ 強ふ 教ふ 等、其他左掲の外はは行の假名なり。
〔行や〕 いゆ	上二段	おゆ(老) くゆ(悔) むくゆ(報)
〔行や〕 一ゆえ	下二段	いゆ(癒) あまゆ(甘) おびゆ(脅) きゆ(消) こゆ(肥)(越) さゆ(牙) そびゆ(聳) たゆ(絶) つひゆ(費)(潰) に

[行わ] ゐ	[行わ] い う ゑ	
上二段	下二段	
ゆ(煮) はゆ(生) 映(映) ひゆ(冷) ふゆ (殖) もゆ(燃) 萌(萌) 等の如くやす、やか すと続けらるゝものは皆この假名にして この他は おぼゆ(覺) きこゆ(聞) さ かゆ(榮) すゆ(饑) なゆ(痿) ほゆ(吼) (吠) みゆ(見) まみゆ(謁) もだ ゆ(悶) こゝゆ(凍) 等なり。 うう(植) 栽(栽) 樹(樹) うう(飢) 饑(饑) すう (据) ゐる(居) ゐ(以) ひきゐる (率 引以 る) もちゐる(用 持以る) (用はは行上二段にも活く)		

[行だ] ぢ づ	[行だ] ぢ づ	
[行ざ] ぢ ず	[行だ] ぢ づ	
	上二段 下二段	
とづ(閉) よづ(攀) はづ(恥) ねづ(振) おづ(怖) もみづ(紅葉) とづ(綴) ひづ(漬) なづ(撫) ついづ(序) まうづ (詣) いづ(出) ぬきんづ(擢抜き出づ) 右の外は皆ざ行の假名なり。		

○注意 こゞえじに凍死) うゑき(植木) おぢけ(怖氣) 等の如く熟語となるも假名遣は變らず。

二、行の假名遣 (傍に●あるものは推知するを得る假名遣なり)

[列] 假名	假	名	遣
は	語の中、尾にてわと發音するものはわとはと紛る。		

左掲の外は皆はなり。

あ	
(わ) 列	
わ	あわつ(惶) あわたし(周章) いわし(鱚) うわ る(植) かわく(乾)(渴) くわぬ(慈姑) ことわざ (諺 言葉) ことわり(斷)(理) こわいろ(聲色) こ われ(聲音) さわぐ(騒) さわやか(爽) すわる(据 (坐) たわむ(撓) はらわた(腸 腹綿) うらわ(浦 同) ゆわう(硫黄) よわし(弱) あわ(泡) くつ わ(轡 口輪) くるわ(廓) しわ(皺) のわき(野 分) しわる(撓) たわいなし(無思辨) たわやか(嬋 娟)

い	
ひ	語の中、尾にていと發音するものはひいゐ紛る。左 掲の外は皆ひなり。
い	かい(權) かうがい(筭) さいはひ(幸) ついたち (朔 月立) やいば(刃) たいまつ(松明 焼松) ついたて(衝立) さいたま(埼玉) さいづち(木椎) ついで(序) ひいき(最負) ひいづ(秀) おほいに (大)
ゐ	(・あるは皆音便なり。此外「泣いて」「たかい」等動詞、形容詞の音便 あり。)
ゐ	ゐ(居) ぬざり(壁) もとぬ(基 本居) (まごぬ(團樂 圓居) くもぬ(雲居) しきぬ(敷居) どりぬ(鳥居) かもぬ(鴨居) ゐ井

		(い) 列
う	ふ	
いもうと(妹)	おとうと(弟)	あきうご(商人)
うべ(首)(頭)	かうべ(神戸)	かうがうし(神々)
		か

語の中、尾にてうーおーと發音するものはふう紛る左掲の外は皆ふなり。

		列	う
(あ)	(ち)		
かうがい(筭)	かうし(格子)	かうばし(香)	かう
ほね(川骨)	かうもり(蝙蝠)	かうむる(蒙)	かう
より(紙縊)	こうぢ(小路)	こうや(紺屋)	さうざ
うし(騒々)	たうげ(峠)	てうづ(手水)	はうむる
(葬)	はうき(箒)	ひうが(日向)	まうす(申)
うく(設)	まうづ(詣)	まらうご(客人)	やうか(八
日)	さう(然)	ごう(何)	さう(接尾語)
やうやう(漸)	からうじて(辛)	やう(様字音)	花
のやう)	う(口語未來推量)	行かう)	よう(同上)
見よう)			

(此の外おもて(思) はやう(早)の如き動詞形容詞の音便あり。)

え 列		え	へ
ゑ	ゑ(餌) ゑ(繪) ゑ(る(彩色)) ゑむ(笑) ゑくぼ(曆) ゑふ(醉) ゑる(彫) ゑぐる(劔) ゑかう(廻向) ゑぐし(鹼) ゑた(穢多) ゑぼし(烏帽子) (單音及び 語頭の音にしてゑと發音するも此の外は皆えなり)	え もえぎ(萌黄) ふえ(笛) ひえ(稗) さいね(蝶螺) ひこばえ(藁) ゆふばえ(夕映) はえ(榮) きのえ (甲 木兎) ぬえ(鵝) しづえ(下枝) ながえ(轆 長柄) いりえ(入江) みえ(外見) (此の外や行に活く動詞)	へ 語の中、尾にてわと發音するものはへねる紛る。左 掲の外は皆へなり。

お	こゑ(聲) すゑ(末) こすゑ(梢) つゑ(杖) つく ゑ(机) ゆゑ(故) ゆゑん(所以) いしすゑ(礎 石据) すゑ(陶) ともゑ(巴) (此の外うゑ(植)うゑ (飢)すゑ(据)の三動詞)	お 語頭にておと發音するものはおをあ紛る。左掲 のをあの外は皆おなり。おは語の中、尾にある ことなし。
---	---	--

お列に於てはおと發音するものゝ内(1)おを及びあ列のあ
 紛るゝものと(2)ほを及びう列のふ紛るゝものとの二種あ
 り。

(1)

を

を(雄)(男)(夫) たこ(男) たのこ(男子) たつこ(夫)
 たす(牡) たんごり(雄鶏) たし(雄々) を(緒)を(尾)
 を(小) を(芋) をか(岡)(丘)(陸) をかし(可笑)
 をがむ(拜) をぎ(萩) をけ(桶) をこ(痴)
 をさ(長) をさなし(幼) をさむ(治)
 (納)(收)(修) をさ(大抵) をしむ(惜) をしき(折敷)
 をし(鴛鴦) をしへ(教) をち(遠) をち(伯父)
 をば(伯母) をとつひ(一昨日) をとつし(一昨年)
 をとめ(小女) をとり(囹) をごる(踊) をの(斧)
 をのく(戰慄) をはる(終) をひ(甥) をり(檻) をり(時節) をる(居)
 をる(折) をんな(女) をみなへし(女郎)

(お) 列

を	ほ	あ	花) をろち(大蛇) をかす(犯) をこたる(怠) をごる(奢) をさ(箴) をしやう(和) をちご(越度) をつとせい(臘肭獸) をごす(緘)
あを(青) うを(魚) かつを(鯉) さを(竿) とを(十) みさを(操) めをこ(夫婦) あをむく(仰) かをる(香) しをる(萎) しをり(棗)	語の中、尾にておと發音するものはほをふ紛る左掲のをふの外は皆ほなり。	あふみ(近江) あふぎ(扇) あふぐ(仰) あふ(逢) あふむく(仰) あふせ(おほせ)(仰)	

	ホ		
の	は	は	の
きのふ(昨日)	はふ(這) はふる(投) はうき(箒) はうむる(葬)	はうこぐさ(母子草) よばふ(呼)	
	右の外は皆ほの假名なり。		
	モ		
も	ま	ま	モ
右の外は皆もの假名なり。	まをす、まうす(申) まふ(舞) まうく(設) まう	づ(詣) すまふ(相撲) かまふ(構) たまふ(給)	
	うやまふ(敬) あまう(甘の音便)		
や	やうか(八日)	やうやう(漸)	はやう(早の音便)

	ロ		
よ	ら	ら	ロ
右の外は皆よの假名なり。	まらうご(客) からうじて(辛) とらふ(捕) さふ	らふ(候) ならふ(習) とぶらふ(弔) かたらふ(語)の類	
	あらう(有) なからう(無)等動詞又は形容動詞に未		
	來推量のうのつきたるもの		
	ろ		
	かげろふ(陽炎)(蜉蝣)		
	(動詞にてふの上に来るお段の音は殆ど皆あ段の假名なり。又口語にて動詞が未來の助動詞うの上に来る場合も同様なり。而して是等は其の動詞の語尾變化によりて直に知ることを得。)		

キョ	け	けふ(今日)
シヨ	せ	ませう(敬語の助動詞、…行きませう)
チヨ	て	てうづ(手水) てうな(斧)
リョ	れ	うれふ(憂)
ヨ	ゑ	ゑふ(酔)
シュ	し	はげしう(烈) うれしう(嬉)の類
ユ	い	いふ(云)

(純粹の國語にては拗音に書き表はす語無し)

字音假名遣

(本表は中等程度の漢字によりて作製せり)

○紛るゝ假名遣

あう	かう	さう	たう	なう	はう	まう	らう	わう
おう	こう	そう	とう	のう	ほう	もう	ろう	をう
あふ	かふ	さふ	たふ	なふ	はふ	らふ		

やう	きやう	しやう	ちやう	にやう	ひやう	みやう	りやう
う	きよう	しよう	ちよう	によう	ひよう	みよう	りよう
えう	けう	せう	てう	ねう	へう	めう	れう
え	け	せ	て	ね	へ	め	れ
ふ	け	せ	て	ふ	へ	め	れ

い	い	ゆ
ふ	う	う
き	き	き
ふ	う	う
し	し	し
ふ	う	う
ち	ち	ち
ふ	う	う
に	に	に
ふ	う	う
り	り	り
ふ	う	う

發音假名遣

漢

字

ゐ	い
ゑ	わ
を	お
く	か
ち	じ
づ	ず

ゐ

位、爲、畏、威、遣、彙、胃、韋、偉、圍、緯、違

葦、委、萎、尉、慰、惟、維、唯、帷、

ゐ

域、闕

イ

ゐん
ゐつ

允、尹、院、勻、筠、員韻、殞、隕、聿、

以上の外は概ねいの假名なり。但しすつゆるの下にあるい音は皆ゐなり例へば水(する)追(つゐ)唯(ゆる)類(るゐ)の如し。

エ

ゑ
ゑい
ゑつ
ゑん
え

惠、慧、穢、壞、衛、回、廻、會、繪、畫、衛、永、泳、咏、詠、榮、瑩、(營)越、鉞、曰、粵、圓、垣、冤、捐、淵、宛、苑、怨、蜿、婉、鴛、鴦、袁、園、遠、轅、猿、爰、援、媛、

以上の外は概ねえの假名なり。

オ	オ
あう あふ おふ をう わう おう	を をく をつ をん お
以上の外は概ねあうの假名なり。 凹、押、狎、鴨、 邑、挹、悒、 翁、翁、 黄、横、皇、風、王、汪、枉、旺、往、 應、嘔、謳、謳、謳、歐、歐、歐、歐、	を、 屋、 越、 穩、(隱)溫、袁、園、遠、怨、苑、 以上の外は概ねおの假名なり

カ
くわ くわい くわく くわつ くわん か
火、戈、瓜、寡、化、花、訛、貨、靴、華、嘩、禾、 和、科、果、菓、夥、課、顆、裹、渦、過、禍、渦、窩、鍋、 瓦、臥、畫、 快、怪、乖、潰、穢、懷、壞、悔、晦、誨、(海)灰、 恢、談、回、徊、廻、蛔、傀、塊、魁、槐、隗、外、 擴、畫、劃、確、鶴、霍、獲、穫、夔、攫、螻、郭、廓、 活、括、刮、闊、滑、猾、豁、(割)月、 寬、卷、關、桓、完、莞、冠、鰈、欸、緩、貫、 貫、串、患、喚、換、煥、官、管、管、棺、館、宦、還、環、 圓、撰、寔、勸、灌、觀、歡、鐘、鐘、權、丸、紈、願、 元、玩、甌、頑、 以上の外は概ねかの假名なり。

か	かう	高、好、考、交、孝、江、巧、項、腔、昂、降、巷、亢、講、岡、衡、康、更、行、向、香、耕、幸、號、敖、囂
し	しゅう	主、宗、衆、終、聚、蝨、趨、充、銃、戎、絨、從、縱
し	しふ	拾、執、集、澁、襲、濕、揖、楫、輯、茸、習、摺、懼、褶、十、什、汁、入
し	しう	周、秋、州、聚、會、舟、羞、修、收、臭、秀、守、醜、蒐、繡、囚、袖、讐、就、柔、壽、獸
し	しやう	承、鐘、衝、鍾、鍾、稱、誦、升、昇、棟、竦、從、聳、懲、縱、蹤、松、訟、頌、鬆、勝、證、春、冗

シ	シ	繩、乘、剩、丞、蒸、笑、燒、椒、小、少、抄、鈔、蕭、簫、嘯、瀟、焦、蕉、樵、礁、醮、憔、肖、消、硝、稍、霄、詔、哨、道、銷、鞘、悄、宵、召、沼、招、昭、照、詔、紹、韶、擾、饒
シ	せ	涉、葉、屑、妾、躡、憊、捷、睫、媵、習、章、昌、尙、正、商、傷、精、生、將、牀、牆、匠、詳、相、象、省、襄、情、上、狀、淨
ソ	そ	宋、送、走、藪、叢、曾、層、僧、贈、增、憎、緇、宗、崇、綜、踪、淙、奏、湊、輳、忽、葱、總、聰、窓、嗽、漱、叟、搜、艘、廋、櫻、蒺
ソ	さ	颯、卅、市、插、雜

モ	ミヨ	ホ
ま らう	め らう	ほ らう
も う	妙、苗、猫、貌、	は らう
孟、猛、莽、	明、名、	保、寶、報、包、邦、方、彭、烹、萌、暴、亡
		法、乏、
		委、某、謀、戊、眸、
		豐、鳳、封、幫、奉、俸、捧、棒、峯、逢、烽、蓬、縫、
		蜂、鋒、剖、拊、朋、崩、鳴、礪、縹、貿、夢、曹、矛、

ヒヨ	ノ	ニヨ
ひ やう	な らう	ね らう
へ う	の らう	に やう
ひよう 水、馮、憑、	能、農、濃、膿、儂、	娘、嬢、
豹、麟、表、俵、粟、剽、漂、飄、標、嫖、颯、雹、	納、衲、	尿、溺、繞、
廟、苗、描、猫、秒、眇、渺、謬、繆、	腦、囊、	
平、萍、評、兵、屏、病、		

	手	
ぢ	治、地、除、尼、柱、持、痔、峙、(寺) (侍) (恃) (時)	
ぢき	直	
ぢく	竺、屺、忸、軸、舳	
ぢやう	場、娘、貞、丈、仗、杖、定、錠、錠、嬢、釀	
ぢゆつ	朮、怵、述、術	
ぢつ	昵	
ぢよ	女、絮、杼、除、(汝) (如) (恕) (舒) (序) (徐) (叙)	
ぢよく	濁、匿、慝、穉、(辱)	
ぢん	陣、塵、沈	
ぢ	以上の外は概ねじの假名なり。	
ツ		
づ	途、圖、杜、豆、逗、頭、徒、都	

	井	
づ	ず	手、誦
づる	薬、隨、髓、隋、瑞、穠	
づる	づるは通常音にはなし。	

○字音假名遣通則

- 一、同系の諧聲文字(音符の同じき漢字)は假名遣も大抵同一なり
 例かう……………交、效、校、郊、
 こう……………工、紅、功、貢、
 しやう……………尙、掌、裳、常、
 せう……………召、招、昭、詔、
- 二、同系の諧聲文字は字音異なるも其假名遣は同行又は同段に通ふ

例 (おん) 恩因

(おん) 圓員

(おん) 音音

(あふ) 甲押 答合

(こう) 洪公 松共

(えん) 演寅

(わん) 怨腕

(くわい) 會會

(えう) 喬天 笑燒

(たう) 湯 揚羊

三、同一漢字にて一音はう段の單音(吳音)、他の音は拗長音(漢音)なるときは其假名はい段にうを附けたるものなり。

例 (く) 九右流

四、同一漢字にて一音は下に音付き(漢音)、他の音は拗音(吳音)なるときは其の下の假名はやうなり。

例 (けい) 兄生 明平

五、同一漢字にて一音はう段の單音(吳音)、他の音はお段の長音(漢音)なるときは其假名はお段にうの附きたるものなり。

例 (く) 工頭 奉供

六、同一漢字(入聲字)にて一音は促音、他は長音なるときは其長音の假名は促音をふに改めたるものなり。

例 (がつ) 合併 雑誌 じつせん 十錢

七、う段の假名の下にイ音はゐ、其他はいの假名なり。(す、つ、

ゆ、るの下のい音はゐなり)

○假名遣に関する訓令抜萃

(明治四十一年九月七日文部省訓令第十號)

惟ふに假名遣は時勢の進歩に伴ひ整理を要すべきこと勿論なりと雖も尙益慎重なる研究を積み以て目的を達せんことを期す省令改正の結果字音假名遣は小學校に於ても他の學校に於けるが如く古來慣用の例によるべく教科用圖書亦之によりて編纂せらるべし然れども字音假名遣の爲徒に國語の學習を難澁にし兒童の心神を過勞せしむるが如きは務めて之を避けざるべからざるを以て敢て繩墨に拘泥するを要せず便宜従前の假名遣を許容する等取捨其の宜しきに従ひ適當の教授を施さんことを要す。

同訓異字便覽

(本便覽は中等程度の文字を擧げたれば之に漏れたる文字は採觚字訣、譯文筌蹄、虛字解等につきて見るべし)

あゝ

嗚呼

廣く感嘆の意味に用ふ。嘆賞、嘆美、嘆愁の語なり。【例】嗚呼忠臣

噫

専ら哀傷、痛痕、不平の意に用ふ。【例】噫無情、噫斗筭之人

あかし

赤

濃からず薄からず中間の度を言ふ。血の色は赤なり。

朱

赤より少し色濃きものにして赤衣といはずして朱衣といひ、又朱冠、朱殿などいふ。

國語要覽

紅

赤に白の混じたるにてべにの色なり。年少者の顔色のあかきを紅顔といふ。

丹

あかの内最も濃き色なり。

緋

赤色の麗々しきなり。緋の衣、緋の袴などの如く色の美しく光あるなり。

赭

赤と黒と混ぜし色なり。

あがなふ

購

金錢にて物を買ひさるること。【例】購求、購買

贖

物を罪の代りに出し請ひて其罪を消すこと。【例】贖罪

あきらか

明 すべて聞きこその反對、最も廣く用ふ。【例】明月、著明、公明

昭 多く道徳上に用ふ。【例】神明昭々、昭明の徳、

あく

厭 いやになるほどにあぐみ満ちたるなり。即厭ひ嫌ふなり。【例】厭世、厭離

飽 欲する思に足り満つること、厭ひ嫌ふほどには至らぬなり。

あぐ

擧 下にあるものを上にあぐる意。【例】擧げ手、擧げ人

揚 勢よくあぐる、又は押しあぐる意。【例】發揚、抑揚

扛 重きものを持ち上ぐること。【例】力扛、鼎

中

方 矢が的にあたるなり。【例】百發百中、的中、

あづかる

預 もさ或事に自分も仲間入りする義なるも今日にては他の金銭物品等をあづかるをいふ。

與 或事を成すに自分が仲間となりてそれをなす意。

干 をかす又はもさむとよみて差出でて其事にあづかる事。【例】干渉

關 或る事に心のかゝはりて離れぬなり。【例】關心、關係、

あつし

厚 薄の反對にして意廣し。【例】厚板、濃厚

昂

あたる 氣のあがること。【例】激昂、意氣昂然

暖 氣候の暑からず寒からず身に適するをいふ。【例】暖氣

温 水の熱度の高からず低からざるなり。【例】温泉、温湯

煦 日光のためにあたゝかになること。【例】春日照々

あだ

仇讎 二字ともあだかたきの義。【例】不俱戴天之仇、復讎

寇 外より押しよするあだ。【例】外寇

あたる

當 廣く用ふ。正面より向ひ合ふこと。【例】當敵、一夫當關

篤 固く強くする意、又熱心なる意。【例】病篤し、篤學、

敦 厚の甚だ深きなり。【例】懦夫も敦し、敦篤

あと

跡 あしあとの義。

迹、蹟、址 事物の過ぎて後にのこるしるし。【例】不踐迹、遺蹟、城址

痕 あとのつきて後にのこること。【例】墨痕

あなごる

侮 主に心中に先方をあなごる。【例】輕侮

慢 言語動作にて先方をあなごる、即侮より甚だし。【例】怠慢、慢罵

あはれむ

憫 人の艱難を傷はしくふびんに思ふ。【例】憫然、憫察

憐 いくくしみ可愛く思ふ。【例】愛憐

あふ

ふき行きあふこと。【例】千載一遇

逢 互に約束しておきて又は彼方より来るを知りて彼方より来る者に面會すること。【例】逢迎

遭 遇と同義なれども熟字の用例に異同あり。【例】遭遇、遭難

合 二つのものが一緒になること、又大小なくびたりと合ふこと。【例】合同、符合

會 あつまりあふこと。【例】集會

あへて

敢 憚らず勢よくすること。【例】敢行、勇敢

肯 がへんずさもよみて心に承諾すること。

あまねし

廣く一般さいふ意。【例】普及、普通

徧 彼にも是にも残る所なくの意、周よりよわし。【例】徧歴

周 隅より隅まで綿密に至り届く意。【例】周知、周到

あやふし

殆 心に安からず思ふこと。

危 あぶなさの迫り近づくこと。【例】危急、危難

あやまる

誤 氣づかずしてあやまる。【例】誤寫

訛 いつそなく間違つてしまふこと。【例】訛言、訛傳

過 悪心なくして有害の失策をなすこと。【例】過失、悔過

謬 筋道を違へること。【例】謬見

あらたむ

徐ろに事物をしなほすこと。【例】變改、更改

革 事物を根本より急に變化さすこと。【例】革新、革命

更 改に似たれど度々あらたむなり。【例】更代、更衣

悛 心をなほすこと。【例】悔悛

あらはる

現 今まで見ゆざりし物があらはれ出づること。【例】現出、發現

見 現と同じ。

顯 隠れず著しく見ゆるをいふ。【例】貴顯、顯著

露 むきだしになること。【例】露出、露見

著 顯と同じ。又あらはすこと。【例】著明、著作

形 今まで空なりしものが形となりて目に見ゆる意あり。

覺 今まで注意せられざりしものが注意せられたること。【例】發覺

表 裏の反對にて裏におきたるものを人目に付く表に出す意なり。【例】表彰

彰 明かに筋目を立て飾をつけて立派に人に示すなり。【例】顯彰

あり

有

在

いかに

如何

何如

若何

奈何

無の反對「がある」といふ。
【例】有力、有爲、有數

「にあり」といふ。或る場所にあること。【例】在郷、在京

何の字に重き意ありて何とやうかといふ意。【例】爲易牙宰相如何(任すべきか任すべからざるか)

如の字に重き意ありて此の如きは宜しきか宜しからざるかといふ問なり。之に對する答は可不可なり。

若は如に通ず。但し如何より輕し。

奈は如何の二音の合したる者にて奈一字にて如何の意あり。故に古は奈のみ用ひられたる例多し。

いかる

怒

憤

恚

いかふ

息

憩

休

いだく

抱

いかりの外にあらはるること。立腹して強く心中におさへ、又は言語外貌に表はるるをいふ。

【例】憤怒、憤激
心に忌々しく思ふこと。立腹して怨む情の強きなり。【例】瞋恚

【例】安息
氣安にやすむこと。

息をつがんと小やすみすること。【例】休憩
務め又は仕事のやむこと。【例】休憩、休暇

手にてかゝへること。【例】抱子

擁

懷

いたむ

悼

傷

痛

疼

いたる

至

【例】擁護、擁立
兩手にてかゝへること。

ふところへ入ること。又心にもつこと。【例】懷壁、懷愁

人の死をかなしむ。【例】哀悼、悼惜

つよくかなしむいたむこと。【例】傷心

悲しみの切なること、又肉體のいたむこと。【例】痛心、苦痛

肉體のいたみうづくること。【例】疼痛

來りいたる、行きつく、行きまじく等意廣し。【例】行人至、至善、至大

到

詣

いつはる

偽

詐

佯

いづくんぞ

焉

一處より一處にいたりつくこと。【例】到家、到着、到來

到に似たれども心に謹慎する意あり。【例】參詣、奏詣

漸々進み來る意あり。

誠又は眞の反對、こしらへいつはること。【例】虛偽、偽善

あざむきだます。【例】詐偽

眞似すること。【例】佯狂

正邪の念をふくみて何といふことぞといふ意。【例】子父を戮す君焉ぞ之を用ひん。

安

得心してその地位に居られぬこと。【例】泰山其れ頽れば吾將安ぞ仰がん。

惡

先方を蔑視しそれを壓伏していふなり。【例】爾今幼し惡ぞ國を識らん。

鳥

兩者の隔りの甚しきを嘆じていふ。【例】父無くれば鳥ぞ生れん

ぬ

廣く用ふ、成長せる犬。

犬

小さいぬ、いぬころ。

ぬ

臥床につくこと。

寢

【例】就寢

寐

【例】寤寐

いばふ

祝

吉事を喜び祝ふこと、又行末をこまほぐこと。【例】祝賀、祝福

賀

【例】年賀

いふ

心に思ふことを口に出していふこと。【例】言論、大言、

言

他人のいひたることを引くさまに用ふ。但し日は現在、云は過去の意あり。【例】子曰、某云

曰、云

うちつけにいはず、うはさの様にいふ。又おもふこと訓す。

謂

【例】謂顔淵曰、予謂

いへ

一棟の建物にして人の住居せる所を廣くいふ。

家

一棟を限らず一敷地内にある者は皆一括していふ。

宅

屋

屋根の意、故に如何なるいへにても屋根あるものは皆屋なり。

舍

【例】馬屋、牛小屋
都市にあるいへにて特に旅籠屋をいふ。又多人数の宿する所。

いましむ

【例】旅舎、寄宿舎

警

人の爲すことに充分注意して能く用心すること。

戒

【例】警察、夜警
豫め固く用心させて失錯せぬ様に注意すること。【例】訓戒

誠

【例】自誠
自らいましむるなり。

いやし

賤

貴の反對、身分のひくきこと。【例】貧賤、賤夫

卑

尊の反對、名譽のひくきこと。【例】卑職

陋

【例】陋劣
田舎らしく品わるきこと。

鄙

【例】野鄙

いゆる

病の日に増しよくなること。【例】快癒

癒

病のさつぱりさなほること。【例】痊癒

いよいよ

段階をふみ漸次に増進すること。【例】愈務めて愈あらはる。

愈

其物の實質に變化あるに非ず、只他よりしかく考へるなり。【例】天をあふげば彌高し。

彌

いる

出の反對、はいること。
【例】輸入、入學

入

【例】受納
うけ入るゝこと。

う

【例】包容、人を容る。
つゝみいるゝこと。

得

失又は喪の反對にして手元にな
きものを自然に手に入るゝな
り。
にはかに事物をうるなり。意外
に手に入るゝなり。【例】捕獲

獲

種子を蒔くなり。
若き草木の地を移して成長せし
むるなり。【例】植樹、植民

うごく

静の反對にて大小輕重の事物に
廣く用ふ。
定の反對にてゆらめくこと。

動

うごかすも他動詞にのみよむ字
なり。ゆするといふ意。
【例】撼天動地

揺

【例】撼天動地

撼

うしなふ

得の反對、取り失ふこと。
【例】失望、損失
大事な物をなくすること。
喪氣、喪父
ほろびうしなふこと。
【例】死亡、散亡

失

喪

亡

うすし

厚の反對、物又は徳分のうすき
なり。【例】薄氷、薄徳

薄

栽

植と同意なれども手入する意あり。
【例】栽培

うかがふ

ひそかに見ること。のぞくこと。
又窺に機に至るを待つこと。
さぐりうかがふ、又顔出したす
ること。

伺

様子へのぞみうかがふ。又訪ふ
の敬語。【例】伺候、斥候

候

物を手に受けさること。
上のものをうくること。
【例】承恩、承知
受に同じ、

承受

無形の物をうくること。
【例】天稟、稟命

稟

淡

濃の反對、色味のうすきなり。
【例】淡紅

うたふ

長く聲を引き節をつけてうたふ
こと。
はやりうたなり。獨りうたふ之
を謠とあり。即徒然をなぐさむ
るためにうたふなり。【例】謠曲

謳

長きうたの中より一部分取り出
して歌ふなり。
さなふること、唱することなり。
佛教の經文を唱ふる如きなり。

唄

場所又は物についていふときは
中央の意。【例】中天、中國
外の反對、場所又は物のうちが
はなり。故に中は内なるも内は
中にあらず。【例】内地

中

内

裏

表の反對にして人目に立つ公の
ことを表さいひ、隠れたること
を裏さいふ。

うつ

罪をさがめてうつ。
【例】追討、征討、

手又は物を以て強くたたくこ
と。【例】擊殺

たたくことに廣く用ふ。
打撲、打破

非をせめならしてうつこと。
【例】征伐、攻伐

手のひら又は板の類をうつこ
と。【例】拍手

小撃にて字音のごとくぼく／＼
さうつなり。【例】撲瑩、相撲

うつす

映

光が物にうつること。
【例】反映

うつる

一所より他へ引きうつること。
【例】移轉

下より上へ又上より下へうつ
る。【例】榮遷、左遷

立ちのくこと。
【例】水草を逐うて徒る。

うばふ

強ひて引きたくること。
【例】掠奪

位をうばひさることにて下なる
者が上をうばひさることなり。
【例】篡弒

褻

位をうばひさることにて與へた
るものをさりかへすなり。
【例】褻奪

うらむ

人を憎む情深く毒りて仇とする
こと。【例】怨恨

怨

怨の深きこと、又残念に悔ゆる
意あり。【例】遺恨

恨

悔の意に用ひらるれど恨より淺
し。【例】遺憾

憾

うるほふ

乾の反對にて水分のあること。
或物を總體にしめらすこと。
【例】汗背を沾す。涙巾を沾す。

濕

沾より一層水分多く滴る程なる
をいふ。
燥の反對にて沾と濡との間にあ
り。【例】温潤

濡

沾

潤

うれふ

心中にて心配苦勞すること。
【例】憂國、憂慮

憂

かなしみありて氣の浮かぬこ
と。【例】旅愁、愁然

愁

病、災難などを苦にすること。
【例】患難

患

えらぶ

こしらへること、記述すること。
【例】撰文

撰

多數中より吟味してえりぬこ
と。【例】選出、選手

選

多數の混入せるものを類を立て
、區別するなり。【例】擇言

擇

おくる

人の出發を見送ること、又おく
り届けること。【例】送別、送附

送

贈

人に物をおくり呈すること。
【例】贈物

おこたる

怠
心のたるむこと、なすべきことを厭ひながら爲す。【例】怠慢
心をゆるむること、今までの決心をにぶらすなり。【例】懈怠
勤の反対にして爲すべきことをなさざるなり。【例】懶惰

おこる

作
物事の出来始むること。

興

物事の益盛におこりたつこと。
【例】興隆

起

伏したるものが起き立つこと。
【例】起伏

おこる

奢

儉の反対でいたくにする事。
【例】奢侈、豪奢

驕

心高ぶり傲慢なること。
【例】驕傲

おす

力を用ひておしやること、上へおすこと、又準ふこと。
【例】推進、推擧、推知

推

上よりおしつくること。
【例】押壓

押

下へおす、又しひたぐる義。
【例】壓力

壓

おそる

未来をおそるゝこと、又用心しおそるゝこと。
【例】恐懼

懼

畏

はばかりおそるゝこと。
【例】畏敬、畏服、畏友

怖

おちけこわがること。
【例】恐怖

おつ

墮

すべりおつること。
【例】墮落

落

意味廣し、物の上より下へおつること。
【例】落第、落花、落命、低落

墜

下へ落ち込むほごにつよきなり。
【例】墜落

隕

高き所よりまつすぐにおつるなり。
【例】隕石

おどろく

驚

廣し突然恐るべき事起りて心の惑ふなり。
【例】驚天、驚怖

駭

驚より強し。身體までも戦き震ふなり。
【例】震駭

愕

駿より尙一層重し。驚き立ちて周章するなり。
【例】愕然

おふ

追

逃ぐるものを追ひかくること。
【例】追捕、追撃

逐

おひ拂ふこと。又おひまはすこと。
【例】放逐、驅逐

おほふ

覆

上にかけてかぶせさへぎること。
【例】覆面

蔽

おほひかくし、つゝみかくすこと。
【例】隱蔽

蓋

ふたをするやうにおほふこと。
【例】蓋世之勇

掩

さへぎりかくすこと。
【例】掩護

おほむね

比率の意にてならしみつものこと。

趣

【例】趣旨

率

おしならしての意。

かく

物を釘などに引かくること。

概

【例】概算、概略

掛

【例】掛物

おもふ

最も廣く用ふ。心に考ふるること。

懸

【例】懸額、懸軍

思

【例】思慮、思案

羅

【例】懸額、懸軍

憶

昔を思ひ出す。

係

【例】懸額、懸軍

懐

【例】述懐

かくる

かくれて姿の見えぬこと。

想

我が心にこしらへておもひ察すること。

隠

【例】隠蔽、隠退

おもむく

先方へかけつけ行くこと。

匿

【例】深蔵

かたし

脆の反對にて物の外面より中心までもかたきなり。

曾

【例】曾遊の地

かなしむ

心に憂はしく、不憫に思ふこと。

堅

【例】堅城

悲

【例】悲哀、慈悲

硬

【例】硬骨

かなふ

【例】哀傷

固

【例】險固

稱

【例】名實と稱ふ。

捷

【例】戦捷

適

【例】適當、適宜、適合

克

【例】克己

協

【例】協同

かつて

前にしばくさいふ意なり。

かば

【例】協同

かへつて

あさしざりするこゝにて前に向
きながら後にうつるなり。
【例】勝たんとして却つて敵の術
中に入る。

却

全く我思に異なるなり。
【例】意外にも反つて破れたり。

かへりみる

うしろをふりかへりて見るこ
と。【例】回顧

顧

自ら氣をつけて見るこゝと。
【例】反省、省察。

省

目をかけ愛するなり。
【例】眷顧

眷

かへる

出た處にかへるこゝと。
【例】歸省、歸宅

歸

川

水の流るゝは大小長短によらず
川なり。
支那の黄河及其支流をいふ。今
日は廣く用ひらるれど古來慣用
以外には用ひざるを可さず。

かはる

うつりかはるこゝと、姿のかほる
こゝと。【例】變遷、變化

變

同じやうなものがさりかはるこ
と。【例】交代、代用

代

物の新にかはるこゝと。
【例】更新、更衣

更

物のかはりて全く原形をさゞめ
ざるをいふ。
【例】腐草化りて螢となる。

化

悪しく變するなり。【例】此盟を
渝へば國を亡すに至らん。

渝

悪しきものさかはるこゝとなり。
【例】隆替

替

還

往の反對、往き先よりかへるこ
と。【例】還幸

返、反

廣し、ひつくりかへるこゝと。向ふ
にゆきてあさがへりするこゝと。
【例】返事

かまびすし

喧

人の言をうちけし我が言をきか
しめんこ一層高聲に喋るこゝと。

嘩

人の言をきかず自分々々に喋る
こゝと。【例】喧嘩

かんがふ

考

事物の道理を思ひはかるこゝと。
【例】考案、考查

稽

二者を引き比ぶる意なり。稽古
は古と今とを注意して比べ合す
こゝなり。

かる

かへつて

あさしざりするこゝにて前に向
きながら後にうつるなり。
【例】勝たんとして却つて敵の術
中に入る。

却

全く我思に異なるなり。
【例】意外にも反つて破れたり。

かへりみる

うしろをふりかへりて見るこ
と。【例】回顧

顧

自ら氣をつけて見るこゝと。
【例】反省、省察。

省

目をかけ愛するなり。
【例】眷顧

眷

かへる

出た處にかへるこゝと。
【例】歸省、歸宅

歸

枯

草木などのかるゝなり。
聲のかるゝなり。

嗄

水氣のなくなるなり。

涸

かわく

潤の反對にて火の熱にてかわく
なり。【例】高燥

濕の反對にしてしめり氣のなく
なるなり。

乾

喉に唾の潤なきなり。

渴

き

廣し、木のすべてをいふ。

木

植木の意にして生氣あるものに
かぎる。

樹

きく

汚の反對、甚だきよきこと。
【例】潔白

きる

一體のものをきりはなつ。
【例】斬罪

物をはきみきるなり。
【例】翦定

續かぬ様にきりはなつにて斬よりも細々ききるなり。
【例】截斷

刀にてきりはなち細かにきりきざむこと。
【例】切斷

たききること木をきるなり。
【例】伐木

衣類をたちきるなり。
【例】裁縫

くだる

上に對して眞直に下にくだるなり。故に意強し。

聽

聞

きはむ(きはまる)

窮

究

極

谷

きよし

清

淨

注意してきくこと。
【例】聽聞

聲の耳に入ること。
【例】風聞、見聞

物事の最後まできはまること。
【例】窮達

物事の根源を推しきはむるなり。
【例】究竟、研究

本來屋根の棟なり。最高所、極端至極なり。
【例】極限、極端

身動きのならぬこと。
【例】進退谷まる

濁の反對水の清きなり。
【例】清澄

穢の反對奇麗なること。
【例】淨土

降

くづる

登に對し斜に坂路の如きをくだるなり。故に意弱し。

崩

壊

頽

くに

邦

國

くらし

昏

山岳の如き大なるものくづること。
【例】崩壞、崩御

石垣土塀の如く小なる物のそなはれ破れくづるなり。
【例】破壞

いつさなく自然に基礎より破れくづるなり。
【例】廢頽

大國なり。
【例】邦家、舊邦

大國小國通じ用ふ。意味廣し。

太陽没して暮色を呈する頃をいふ。但し人に昏愚といふときは暗愚と同じ。

潔

斬

翦

截

切

伐

裁

くだる

下

味

暗

晦

けがす

汚

穢

瀆

こたふ

對

答

夕方昏より少しくらききなり。夜明けにも用ふ。あやめわからぬききなり。

眞にくらくして風雨の夜の如きをいふ。

不潔なる水のこと。

汚の甚しきなり。淨の反對。心に安んじすぎ却つて無禮のことあるにいふ。

問對を用ひて人の間に對して委しく道理を明かにして口づから返事すること。

こたへ方の如何にか、はらず用廣し。

應 先方の問に對して同意する時又は否定するときに簡單なる返事をなすなり。

こひねがふ

冀 熱心に心を一方に傾けて其事を待ち居るなり。

希 通常有り難きことをねがひ欲するなり。

庶 斯くならば仕合せなりと望むにて冀希よりよわし。

幾 庶に同じく近しといふ意にて將にかくならんとするときに用ふ。

願 以上凡ての場合に用ひられて差支へなし。

こふ

請 懇ろに所望するこゝにて先の様子子を伺ひ問ふ意をふくめり。

乞 乞ひ求むるなり。我身に利得となる事物を切に求むるなり。

こゆ

【例】超過

【例】山越、越權

これ

彼に對して手近にある場所又は形ある物體を指示して明かにいふ語なり。

非に對する字にして心に正邪を斷すべき或る道理に對して用ふるなり。

之

是、此、兩者の意に用ひらるゝも其意軽く上又は下にある事項の代名詞なり。

茲 指して強くこれといふ意にしてこの場合を譯す。又この有様にてこの意もあり。

斯 是此よりも重く此の筋合といふ意なり。

維、惟 文の初めに注意を惹くために用ひらる。

諸 之をの意。

さかひ

境 しきりの内。

界、堺 地のしきりなり。

さかん

盛 衰の反對、物の勢よき最中。

國語要覽

高くもりあがりたること。

【例】隆起、興隆

【例】壯健、雄壯

火の烈しく燃ゆるが如く勢の強きをいふ。

さき

次第にさかんになることをいふ。

前と同じく物の順序にも時の區別にも過去のこゝにも用ふ。

時の上にて過去のこゝにのみ用ふ。

さく

先と同じく時と順序との何れにも用ふ。

過去の久しきをいふ。故に「久し」もよむ。【例】曩日、曩者

裂

【例】裂帛
ひきさくこと。

割

【例】割鶏
刃物にてきりさくこと。

剖

【例】解剖
厚きものを中央より切りさくこと。

劈

【例】劈薪
刃物にて二つに打ち割ること。

さぐる

【例】捜索
さぐりもさむること。

探

【例】探偵
うかがひさぐること。

さす

【例】刺殺
つきさすこと。

刺

【例】指示
ゆびさす。

指

整

虫のさすこと。

さとする

他の物を自然に我が知るなり、
外物を主とす。【例】覺知、
我心を主とし自理を自然に知る
なり。【例】大悟
覺さ同じ。

覺

悟

曉

さむ

【例】眠覺む
うつゝにかへること。

覺

酒の酔のきゆるなり。

醒

【例】褪色
色のあるなり。

褪

【例】寤寐
目さむるなり。

寤

【例】冷熱
熱のさむるなり。

さらす

物の色を白くせんためにさらす。

晒

物を露天におきて風雨のあたるまゝになしおくなり。

曝

さる

其場を立ち去るなり。

去

時間又は場所をへたつること。

距

さわぐ

鳥虫などの許多聲々に泣くこと。【例】蟬噪、蛙鳴

噪

人のやかましく數多にてわめくこと。【例】喧譟

譟

忙はしくさわぎみだる、義。

騒

さを

竿

竹の幹の枝葉を去れるもの。

棹

舟をやるさなのこと。

しきりに

【例】頻繁
繁くつゞきて又は度々。

頻

【例】切思
ひたさ又ははしみく。

切

【例】連年
うちつゞくこと。

連

しげる

多くにぎやかにしげること。【例】繁多、繁雜

繁

草木のしげること。但し一本一草にていふ。【例】茂樹

茂

【例】人口稠密
密にしげきこと。

稠

したがふ

從

【例】從者
おとなしくつき従ふこと。

隨

【例】隨身、隨て云々
隨ひ行くこと又つるゝこと。

順

【例】順逆
逆の反對にして反對せずそひて行くなり。

しづか

閑

【例】閑人
忙の反對にて爲すことなくひまなるをいふ。

靜

【例】靜止
動かぬこと。躁がしからぬこと。

徐

【例】徐行
言語動作の早からぬなり。

寂

【例】寂寥
喧の反對、物音のやむなり。

しぬ

死

生に對し貴賤高下の別なし。

崩

天皇の外用ふべからず。

薨

三位以上の貴人の死。

卒

人臣の五位以上の死。

歿

物の水中に入り込む意より人の死して世になきをいふ。

夭

年若にして死ぬるなり。

しばらく

暫

【例】暫時
時の上にてちよつとの間のこと。

姑

【例】姑息
事の上にて其まゝにしておくこと。

且

【例】姑息
姑に似たり。正しき位置にあらずして少しの間假りの位置に止まるなり。

須臾、頃

【例】頃
共に時の上にて少時間なり。

しりぞく

退

【例】退却、辭退
あさしざりすること。

斥

【例】排斥
拂ひしりぞくること。

卻

【例】却
あさしざりしてさくること。

しる

知

【例】知己
事の本性を知る。

識

【例】面識
物事の一部のみを知る。知より浅し。

しるす

誌

【例】某誌
姓名を書きしるすこと。

識

【例】著者識
文章をかきしるすこと。

記

【例】筆記
書きさること。

録

【例】記録
書きうつすこと。

しろし

白

【例】白
黒に對するしろきもの、總稱なり。

素

【例】素絹
本質のまゝ、しろきなり。

皓

【例】皓たる月光
白きもの、つやあるなり。

すくなし

少

【例】僅少
多の反對にて數量の少きなり。

鮮

【例】鮮
少と同じきも一層強し。

寡 相くらべて人数の少きなり。
【例】衆寡 鮮と同じ。

すくふ

危き處、苦しき所をたすくふなり。
【例】救護

救 一時の難境より救ひて安全の地にわたしやること。
【例】濟度、濟生

濟 ひきよせてたすけすくふこと。
【例】援助

すゝむ

前方に向ひすゝむこと。
【例】進行、前進

進 物をたてまつること、又人をすゝめあぐること。
【例】推薦

薦 説きすゝめること。
【例】勸告、勸誘

すでに

將にの反對にして事の全く終りはてたる上にあらずんば用ひず。

既 未の反對にして事の終るか終らぬかに用ふ。

已 或事の下地すでに定まつて之を變ずべからざる場合。

すなはち

上を受け下につゝくる辭にしてれば則さいはる。

則 こゝより思ふところを明にせんことより渡り合ひの所に用ふ。そこで乃さいはる。

乃 乃に同じ。

其場をはなれず直ちに、其儘、直接に、その意にして事件と事件との關係なり。

即

國語要覽

ほめてほげますこと。
【例】獎勵

前 後の反對にして前方へ出づること。
【例】前進

食物を人にすゝむること。
【例】膳羞

すつ

用ふべきものをさり上げず、かまはずにおくこと。
【例】取捨 捨と音義共に同じ。

捨 より強く、用にたゝぬものとして打すつるなり。
【例】放棄 棄の古文。

さりのくること。
【例】撤廢

すてもの、すたりものとしておくこと。
【例】廢物

便

急に手早くさいふ意にして、時の上にて速かにの意。
何時も然ることあり其たびごにの意。

すべて

概括しての意。

總 おしなべて、およその義。

凡 一體に、悉くの意。

都 都と同じ。

せむ

城を攻めること、又人の過失をさがめること。
【例】攻城、攻撃

責 罪をせめ正すこと。
【例】譴責

そこなふ

面前にて先方の迷惑なることを言ひはづかしめ困らしむることを。

詆

そとど

川の流れそとど、水をそとど。
【例】注入

灌、漑 草木に水をかくること。
【例】灌漑水

瀉 瀉つと一時にそとど。
【例】吐瀉

沃 柄杓にて一度にさぶりさかくること。

濺 水沫のさび散りかゝるをいふ。

洒、灑 共に水をまきちらすなり。

そなふ

物の全くそろつてゐること。
【例】具備

害 利の反對、事物が不利となるなり。
【例】損害

損 きずつけ、やぶること。
【例】毀損

賊 心性をいためやぶること。
【例】亂臣賊子

そしる

人の非をあらはにそしること。
【例】誹毀

かげにてそしる。
【例】讒謗

人をそしりきずつくること。
【例】毀傷

人の缺點なきを強いて缺點をたづねつくりて非難すること。
【例】誹謗

人にある缺點を見出してそしる。
【例】譏刺

害

損

賊

誹

謗

毀

訾

譏

備

入用なもの、不自由なくあること、又用意すること。
【例】準備、豫備

物をそなふること。
【例】供物

ある上に増し加ふること。
【例】添加

かげがへ、ひかへ。
【例】副長

つき従ふこと。
【例】沿海

そむく

うらがへるにて衆、人々全く反對に變心すること、多く軍事に用ふ。
【例】叛逆

叛さ同じけれども、其用法せまふ。各人間のことにも事物にも用ふ。
【例】反動

反

叛

沿

副

添

供

備

面前にて先方の迷惑なることを言ひはづかしめ困らしむることを。

詆

そとど

川の流れそとど、水をそとど。
【例】注入

灌、漑 草木に水をかくること。
【例】灌漑水

瀉 瀉つと一時にそとど。
【例】吐瀉

沃 柄杓にて一度にさぶりさかくること。

濺 水沫のさび散りかゝるをいふ。

洒、灑 共に水をまきちらすなり。

そなふ

物の全くそろつてゐること。
【例】具備

背 背りすつること。
【例】背戾

物にさからひたがふること。
【例】乖離

意軽く殆んど其字のさす處なし、一種の發語なり。

そのさよむさきより輕きもさす所あり。

たかし

他の物より高きこと、見上ぐるやうに高きなり、廣し。

山のけはしくたかきをいふ。轉じて人を尊ぶ意。
【例】崇拜

中央の弓形に高くなれるをいふ。
【例】穹隆

隆

崇

高

其

夫

乖

倍

喬

樹木のそびえあがれるなり。
【例】喬木

たくはふ

少量づつの餘裕をさり集めて藏めおくこと。【例】蓄積
後日に入用なるをかこひおくこと。【例】貯蓄

儲

用意にたくはへおくこと。
【例】儲君

たすく

互に力のたらざる所をたすけあふこと。【例】補助
上の人の及ばざる所を傍よりたすくるなり。【例】良佐
廣義なり。力をそへてたすくること。【例】助力
倒れんとするものを手をそへてたすくること。【例】扶助

輔

佐

助

扶

援

困難するものをひきあげたすくること。【例】援兵

佑

義にたがふをいさめたすくるなり。【例】天祐

相

長上の缺點をたすく。

資

もてをやること。

たたかふ

最も廣く用ふ、勝負を争ふこと。但し今は専ら多人數の戦争にいふ。

戰

闘

たゝきあふこと。今は専ら個人に用ふ。【例】格闘

たゞく

たゞきうつこと。
【例】叩門

叩

敲

たゞきて聲を出すこと。
【例】敲金、敲門

ただす

ゆがめるを眞直になすこと。
【例】正誤

質

訂

糺

匡

たつ

絶
断
裁

二つにたちきること。
【例】一刀兩断
きれてあこなきこと。
【例】絶命
衣服なごをたちきること。
【例】裁縫

たつ

しかたつこと、たちてなること。【例】直立

建

起

樹

たどへ

植立つること。
【例】徳を樹つること
深厚
他の類似せることを假りに引出して説く。【例】譬喩
譬に似たり、但しいさむる意あり。
意味廣し。例をあぐること。

たとひ

縦

全くあるべからざることを設けていふにあらす、よしやさいふ意なり。

縦令

縦と同じ。但し縦は能相の場合、縦令は所相なり。

假令

さても出来ぬことを今かりて出来るさしてもの意。

たに

谷

兩山の間ひくき所。

溪

本字は谿なり、水の下るゝ谷なり。

澗

溪と同じきも水流大なり。

たのしむ

娛

憂を散ずること。【例】娛樂

樂

心におもしろきこと。

たのむ

たよること。

頼

【例】依頼、信頼

恃

自らあてにするること。【例】恃力

負

うしろだよりにするること。【例】責を負みて權を好む

たふとぶ

貴

位の高きこと、又高き品として重なること。【例】貴顯、貴玉

尊

たつとび敬ふこと。【例】尊敬

尙

上と音義共に同じ、貴き物として大切にし、又上品なりとすること。【例】尙武、高尚

崇

尊に似てあがめうやまふこと。【例】崇拜

上

尙と同じ。

たふ

堪

しのぶこと、がまんしてこらへさぐること。【例】堪忍

任

能力のつゞくこと。【例】擔任

勝

兩者相争うて打勝つこと。

耐

外部よりの迫害をもちこたふること。【例】忍耐

たふる

仆

よこにたふるゝこと。

倒

ひっくりかへること。【例】顛倒

斃

たふれしぬること。【例】斃死

殞

斃に同じ。

たま

玉

陸より出づる美しき石の總名。

珠

水中に生ずる美しき貝類のたまをいふ。

圭

水晶の如く長くして尖れる玉。

璧

まるきたま。

たまたま

適

丁度をりよく。

偶

思ひよらず。

會

をりしも、をりから。

たまふ

賜

賞して下したまふこと。【例】恩賜

給

入用ほごあてがふこと。【例】支給、供給

ちかふ

誓

【例】言葉にてちかふこと。

盟

【例】誓より重し、性を殺し神にちかひて約すること。【例】同盟

つかさどる

典

【例】或事を充分に支配すること、きりもりすること。【例】典職

司

【例】目を放たず注意すること、又人の上となり下を支配すること。【例】國司

掌

【例】手の内の物の如く職分を自由につかさどること。

主

【例】最も大切にするること、又他の者を使役すること。【例】主宰

つかふ

仕

【例】主人をさりて奉公すること。

事

【例】仕官

使

【例】つかはれかしづくこと。

つ

【例】さしづして使ふこと。

つ

【例】使者

つ

【例】添ひつくこと。

附

【例】附屬

著

【例】びたりさつくこと、又到りつくこと。【例】附着、到着

就

【例】従ひつくこと。

即

【例】去就

つ

【例】その座につく。

つ

【例】即位

衝

【例】つきあたる。

つ

【例】衝突

突

【例】さきにてつく。

搗

【例】搗ききれてつく。

春

【例】白にてつく。

撞

【例】或物を以て他の物にうちあつる意。【例】撞鐘

つ

續

【例】断の反對、断れたるをつなぐ。

繼

【例】絶えたるあまをつぐ。

嗣

【例】ひこのあまをつぐ。

次

【例】順序をたて、次第

【例】順次、次第

亞

【例】次とほゞ同じ、つぎにつくこと。

接

【例】二物をつぎあはすこと。

つ

盡

【例】心のあるだけをきはむること。

竭

【例】盡瘁

殫

【例】盡に同じ。

殲

【例】のこらすさりたつること。

悉

【例】のこらす殺すこと。

つ

【例】一つも残さぬ意。

作

【例】我心に思ふことをまことし始めてつくり出すなり。【例】著作

造

物をくみたてこしらへたつること。【例】造管

製

物を工夫してつくり出すこと。【例】製法

つつしむ

謹

一筋に念を入る、又言葉をつしむ。【例】謹直、謹言

慎

用心して内はにするこゝと、又心をつしむこゝと。【例】慎獨

肅

つしみ引しまること。【例】嚴肅

欽

畏敬すること、天皇につきていふ。【例】欽定

つとむ

勤

骨折り精出すこゝと。【例】勤勞

勉

いやなこゝともがまんしてつとむること。【例】勉強

力

力を入るこゝと。【例】力行

努

力よりもつよし、いきばり力むること。【例】努力

務

精力を一事に用ひつとむること。【例】本務

勗

勉に同じ。

つねに

毎

たびごとに。【例】毎度

常

たげず連續せるなり。【例】日常

恒

いつも變ぜざるなり。【例】恒久

つひに

遂

このこゝとより彼の事に及ぼす影響をいふ。

卒

時間上結極のこゝと、はてはなり。

終

始の反對にして、はては、さうさうなり。

竟

つまり。

つまひらか

詳

略の反對にて、くはしく明細にするなり。【例】詳記

審

事物を念を入れて確實にするなり。【例】審議

つらなる

連

物の筋のこゝとくつらなるなり。【例】連珠

聯

縦横につらなるこゝと。【例】聯絡

列

ならびつらなるこゝと。【例】排列

陳

順序を立て、しきならぶること。【例】陳列

とき

時日につけていふ。

秋

秋は物の熟する大切なるときなれば、肝要の時節といふ意なり。【例】危急存亡之秋

ととのふ

よく和合すること。【例】調和

整

正しくそろふこゝと。【例】整理

齊

不同なく平同にさゝのふ。【例】一齊

とどむ

止

やむること。【例】廢止

留 留任 其の場にまゝまる。
 【例】留任
 停 止ばらくまゝまる。
 【例】停車場
 駐 馬をまゝむること、又留に似て重し。【例】駐在
 とふ 廣く用ふ。不審のことをたづぬ、又人をたづぬ。【例】尋問、音問
 訪 行きて人をおとづる。
 【例】往訪
 訊 さいたゞすこと。
 【例】訊問
 とほる 塞の反對、まほりてつかへぬこと。【例】貫通
 徹 底までまほりぬること。
 【例】貫徹

透 つきぬく、すきまほること。
 【例】透徹
 取 取りて我物にすること。
 【例】取得
 執 物事をかたくすること。
 【例】執着
 探 拾ひること。
 【例】採集
 撮 つまみとること。
 【例】撮要
 捕 追ひかけさらふること。
 【例】追捕
 把 執の輕きにて持つ、握る、掴む意。【例】把持
 操 固くしかま持ちつゞけ放さぬ意。【例】操守
 ながし

長 物又は時のながきこと。
 【例】長大、長時間
 永 時の長きこと。
 【例】永久
 なく 廣く用ふ。何物にても聲を出してなくこと。【例】鳴禽、悲鳴
 鳴 聲を高くあげてなくこと。
 【例】啼鳥
 啼 聲を立てず涙を流してなくこと。【例】悲泣、感泣
 泣 大聲あげてなく。
 【例】慟哭
 哭 なし(なかれ)
 無 有に對する辭。古文无。
 莫 無は事物の有無に關する語なれども、莫は比較上の語とす、即二者を相對していふ語なり。

勿、母共に禁止する意。
 亡 存に對す、從來ありしものなきなり。
 罔 事物その物はあれども我が見えなくするなり。【例】晴雨を罔く晝夜を忘れて走す。
 なす(なる) 事をなしとぐる、事のなりあがること。【例】成業、成就
 成 事をする、又何々なるの如く自動の意。
 【例】有爲、雨雪なる。
 就 なし終ること、出來上ること。
 【例】成就
 作 就の反對、なし初む。
 繩 町噺に作りたるなば、細大に關せず。

索 粗末に作りたるなほ、細大に關せず。

なほ

猶 まだ、やはり。

尙 その上に、やはり。

なみ

波 廣く用ふ、又小さなみ。

浪 はげしきなみ。

濤 大波。

ならふ

習 一事をくりかへしならふ。

倣、倣 先例にならひしたがふこと。

なる

鳥獸などの人になること。

【例】馴鹿

馴

なれ／＼しくなること。

【例】狎侮

狎

ならひて常なること。

【例】習慣

慣

くつろぎ心やすくすること。

褻

にくむ

好の反對、ひどくいやがること。

【例】惡臭を惡む

惡

愛の反對、こづらにく、思ふ。

【例】憎惡

憎

疾、嫉人の長所あるをにくむなり。

にはかに

偷

人の目をはずすこと。

【例】偷安

ねむる

臥床につく意。

【例】就寢

寢

ねむること。

【例】假寐

寐

ねむること、寐と同じ但し寐よりかるし。睡はもさぬねむりすること。

眠、睡

目をさづるのみ、心はねむらず

【例】瞑想

瞑

のこる

無くならんとして少しくのこる。

【例】殘月

殘

あき物物ののこること。

【例】遺物

遺

俄

やがて間もなくの意、前に事ありてそれより間もなきなり。

【例】俄然

遽

思ひもつかず、あはたゞしきこと。

【例】急速

驟

急に度々起ること。

【例】驟雨

にる

似

これさかれと同様に見ゆるをいふ。

肖

本来にるべき道理ありてにること。

ぬすむ

盜

廣く用ふ、人の物をさること。

【例】盜賊

竊

こつそりさぬすむ。

【例】竊盜

剩

【例】餘りてのこること。
【例】過剩

のぞむ

【例】高き所より見下すこと。
【例】臨淵、君臨

望

【例】高き所のぞみ、遠きをのぞむ、又物事を志しのぞむ。
【例】展望、希望

のぶ

【例】あることを受けのぶること。
【例】承述、著述

述

【例】ひろげのぶること。
【例】演説

延

【例】ひきのばすこと。
【例】延期

暢

【例】のび／＼とほりのぶこと。
【例】通暢

宣

【例】ひろくあらはし、あまれくひろむること。
【例】宣言

陳

【例】しきのべつらぬること。
【例】陳情

伸

【例】屈の反對にて事物をひきのぶること。

のぼる

升

【例】昇降の反對、すゝみのぼること。
【例】昇殿

登

【例】物の上へのぼること。
【例】登山

上

【例】下なるものが上にのぼること。
【例】上ノ堂

騰

【例】跳りあがる意、物價の急に高くなること。
【例】奔騰、騰貴

呑

【例】かますに丸のみすること。
【例】呑舟の魚

飲

【例】水をのむ。
【例】飲料

はかる

【例】物の數をかぞへはかること。
【例】總計

量

【例】梃にてはかること。
【例】ものさしにてはかること。

度

【例】心に考へはかる、又人と相談すること。
【例】謀略、謀議

謀

【例】くはだてはかること。
【例】壯圖

圖

【例】心におしはかること、又深きなごをはかること。
【例】推測、測量

測

【例】思慮する意なく見識を以て推知し洞破すること。

料

【例】はく

吐

【例】急に口外にはきだす。
【例】吐露、吞吐

嘖

【例】一寸氣息ふさがり勢をつけてはくなり。
【例】嘖出

嘔

【例】つゞけて胃よりはくなり。
【例】嘔吐

はじめ(はじむ)

初

【例】はじめ、はじめてさよむ。最初のこと。
【例】初等、初日

始

【例】廣く用ふ。物のはじめ、はじめり、はじむることよむ。
【例】始業、始原

創

【例】新にはじむること。
【例】創業、創造

肇

【例】開きはじむること。
【例】國を肇む

首

【例】一番さきなること。
【例】卷首

ばしる

【例】飛走、奔走。
【例】走よりも勢つよし。

【例】奔馬、奔流。

【例】拜趨
小足に早く歩むこと。

恥

【例】恥辱
心にはづかしく思ふこと。

己の見苦しきを人に對してはづること。【例】天に愧ぢず

はにかむこと、はづかしがること。【例】閉月羞花

他の嘲をばづ。
【例】慚愧

愧

羞

慚

ばなす

或事物につきて筋道を立て、人にはなすこと。【例】講話

話に似て少し重し。前後のましまりたるはなしをなすなり。

【例】軍談
相方互にはなしあふこと。故にましまれることにはあらず。

はた

竿頭に羽を挿みて垂れたる房の如きものないう。

今日ののぼりの如きものにてそれに模様をかきたり。

【例】夙夜
軍隊の標旗。

吹きながし。

話

談

語

はやし

走

奔

趨

旌

旗

幟

はづ

早

蚤

夙

疾

速

ばらふ

【例】酒筵
筵にてはらふ。

【例】拂拭
ばつばさはらふこと。今は廣く用ふ。

【例】攘夷
はらひのぞくこと。

災をよげる神式。

祓

攘

拂

掃

ひきめる

知識を以て人の上に立ち心服せしめてひきゆくこと。【例】元帥

帥よりよわし、人の服従する様にしてひきゆるなり。【例】統率

才能を以て多數人の先に立ち指揮するをいふ。【例】將軍

帥

率

將

ひく

廣し、ひつばる、ひきよする。ひきあぐ。ひきのばす。

【例】引力、誘引
力を入れてひく。

【例】推挽
引きする。

【例】曳尾
強くひきつく。